

特集

エネルギー・文化研究所の40年

[対談]

- 02 **変化する社会の中で、
企業内研究所は何を目指し、何を伝えてきたのか**
——企業が生活研究を行うことの意義と課題を振り返って

佐藤 友美子 [学校法人追手門学院理事]

富尾 博之 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長]

山納 洋 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長代理・研究員]

- 10 **エネルギー・文化研究所(CEL)年表 1986～2025**

- 14 **CELの歩み① 草創期 (1986～2000)**

設立と揺籃の時代

——ビジョンの確立、『CEL』誌、ジオカタストロフィ研究と変化の予兆

- 20 **CELの歩み② 中興期 (2000～2016)**

時代の波と向き合う

——研究領域の再定義、チーム力、コミュニケーション戦略と「大衆化」路線

- 26 **CELの歩み③ 再起動期 (2016～2019)**

設立30年の節目に問うた研究所の存在意義

——現在を読み解き、文化を編み直し、未来を構想する

池永寛明 [第9代所長 / 社会文化研究家]

- 30 **CELの歩み④ 再興期 (2019～)**

激動の時代に描く、再興の道筋

——研究するCELから行動するCELへ

田中雅人 [第10代所長] 金澤成子 [第11代所長]

富尾博之 [現所長] 山納 洋 [所長代理]

- 36 **CELへの期待**

島原万丈 / 加藤政洋 / アサダワタル / わかぎ 隼 / 下田吉之 /

谷 直樹 / 濱 恵介 / 山下満智子 / 加茂みどり / 豊田尚吾

[書籍案内]

- 44 **CELの40年を振り返るための10冊**

[連載]

- 46 **再見 上町台地 今昔タイムズ**

第4回 (最終回) 生々流転の地、
“野生”の都市・大阪から未来へ

弘本由香里 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・
文化研究所研究員]=文

[連載]

- 50 **写真家と大阪**

第4回 百々俊二

畑中章宏 [民俗学者]=文

[連載]

- 52 **大阪の胃袋**

第13回 豆は豆でも——うすいえんどうの豆ごはん

湯澤規子 [法政大学人間環境学部教授]=文

- 54 **研究員からのメッセージ**

山納 洋 / 栗本智代 / 弘本由香里 /
前田章雄 / 小西久美子

[CELからのメッセージ]

- 56 **故きを温ねて、新しきを知る**

富尾博之 [大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・
文化研究所所長]=文

世界の記憶にふれる

みんなく收藏品と研究者のまなざし 第2回





左から、小西久美子、山納 洋、栗本智代、富尾博之、弘本由香里、前田章雄

情報誌CEL138号をご覧いただき、誠にありがとうございます。

エネルギー・文化研究所（CEL〈セル〉）は、

1986年4月に大阪ガスの創立80周年を記念して設立され、

2026年4月に40周年を迎えます。

CELは「Research Institute for Culture, Energy and Life」

の略称であり、10年、20年先の社会や価値観、

生活、文化の変化を予測し、企業がそれに適応するための方策を

研究することを目的に設立されました。

この40年間、社会情勢や事業環境が大きく変化する中で、

企業の視点に偏ることなく、

生活者の視点と長期的な視野を大切にしながら、

研究と実践を続けてきました。

今号では、その歩みを振り返りながら、

CELがこれまで果たしてきた役割を改めて見つめ直し、

変わりゆく社会の中での役割や意義について考えていきます。

今後も皆さまからのご意見を大切に、

社会に求められる研究機関として研鑽していきたいと思えます。

どうぞよろしくお願いたします。

大阪ガスネットワーク株式会社

代表取締役社長

村田 稔

【特集 エネルギー・文化研究所の40年】

変化する社会の中で、企業内研究所は

何を目指し、何を伝えてきたのか

— 企業が生活研究を行うことの意義と課題を振り返って

対談

【学校法人追手門学院理事】 Sato Yumiko

佐藤友美子

×

富尾博之

【大阪ガスネットワーク(株)エネルギー文化研究所所長】

Tomio Hiroyuki

山納洋

【大阪ガスネットワーク(株)エネルギー文化研究所所長代理・研究員】

Yamanoh Hiroshi





CELが設立された1980年代は、多くの企業が生活研究所を立ち上げた時代。背景には、「生活者」のライフスタイル研究が、事業活動において不可欠との企業側の認識があった。それから半世紀近くの時間のなか、社会・経済・文化のさまざまな変化に洗われて、企業にとつての生活研究は、その目的、意義、成果において、何が変わり、何が変わらないのか。1989年の設立以来、「サントリー不^{よそま}易^{りゆうこう}流行^{りゅうこう}研究所」

「サントリー次世代研究所」において20年間近く調査研究に携わり、その後も生活研究の分野で多様なテーマ、さまざまなフィールドの調査研究、教育普及活動を続けてこられた学校法人追手門学院理事の佐藤友美子さんをお迎えし、企業の生活研究の歩みを振り返りつつ、未来へと向かうべき指針と期待について語り合う。

脇坂敦史〓取材・構成
栗原論〓撮影

大阪ガス本社ビル(ガスビル)を背景に、左から山納所長代理、富尾所長、佐藤氏。



大切にする社風と、その点は多少
違いますが。

——不易流行研究所は、早い時期から
「生活の中の楽しみ」を研究されていま
した。設立当時、研究所のミッションや
戦略をどう設定されましたか。

佐藤 1980年代、メーカーか
ら消費者に近づく「川下志向」が
ありました。消費の傾向が個別化
し、業界という壁は崩れ、これま
で異業種であった企業がライバル
となりつつあるなかで、企業には
迷いが生じ、「外部へのアンテナ」
を必要としていたんですね。私た
ちは、まずは先達にあたる他企業
の生活研究所を訪ね、インタビュー
調査を行うところから活動を開始
し、調査結果は90年に研究レポー
ト「生活研究最前線」としてまと
めました。この調査によって、生
活研究の意義がおぼろげにわかっ
てきたと思っています。

——まず、他社の生活研究所の研究から
始められたのですか。

佐藤 もちろん業種や企業風土の
違いにより、研究所のタイプもさ
まざまです。印象に残っているこ
ろでいうと、たとえばポーラ文
化研究所「*1」では、化粧品その

ものではなく「化粧する」という
行為を研究しておられた。そうし
た話を伺いながら、嗜好品を扱っ
ている私たちは、「生活の中の楽
しみ」をテーマにしようと考えて
ようになりました。

「美感遊創」を起点に
自らに関わるテーマを発見

——本業を支えるために研究を行う会社
もあれば、本業から距離をとり「未来へ
の種」を探そうとする会社もあります。
サントリーさんは、どうだったでしょう。

佐藤 当初は90周年記念事業の一
環として「酒の文化研究所」をつ
くる話が進んでいました。それに
対し、2代目社長である佐治敬三
(1990年に会長就任)が、今さら
酒の研究所を設立する意味はない
と反対し、コンセプトを考え直し
れました。生活文化企業を標榜し、
「美感遊創」という言葉を佐治は
盛んに言っておりましたから、

「新たな時代の生活文化のあり方
を探る」ことになり、生活の中の
何が不易流行なのかを探ることが
研究所のミッションになりました。
——「美感遊創」という理念を実現する
ため、どんな研究が必要かを考えた。そ



の答えが「生活の中の楽しみ」だったの
ですね。

佐藤 必ずしも社業に直結する
テーマである必要はありませんで
した。ちょうど「国際花と緑の博
覧会」[*2]の開催の時でもあり、
最初のテーマは「花」。あとは
「社交」「年中行事」「スポーツ」
「旅行」から「盛り場」まで……。
いずれも歴史的意義にとどまらず、
現代のトレンドにつなげていくと
いう、切り口の部分は変わらない
よう意識していました。

——その切り口というのが研究所の名前
にもなった、俳聖・松尾芭蕉の言葉「不
易流行」[*3]ということなのですね。

佐藤 佐治は俳句にもたしなみが
あり、この一風変わった名称が選
ばれました。不易とは時代を超え
た真理、流行とは法則を打破する
新奇な物事。それは別々のもので

——佐藤さんが立ち上げに関わられたサ
ントリー株式会社の不易流行研究所
(1989年設立)をはじめ、1980年
代は多くの企業で生活研究が行われました。
私もエネルギー・文化研究所(通称
CEL(セル))も、そのひとつと考えて
います。本日は、そんな時代背景も振り返
りながら、企業の研究所が生活研究を行う
ことの意味や課題についてお話を伺い、あ
らためて多角的に捉えたいと思います。
佐藤 まずは40周年、おめでとう
ございます。よくぞここまで続け
てこられました。企業内の小さな
研究所で仕事をした経験から、そ
の大きさがよくわかります。サン
トリーは消費財をつくる会社です
から、「売れなかったらやめる」
のは普通のこと。インフラを担う
大阪ガスの「なくさないこと」を

は「不易と流行の元はひとつ」、不易が流行を、流行が不易を動かす、という考え方です。私は共働きで子育て中という状況から、生活に密着した「家庭の年中行事」をテーマに選びました。余裕のない生活の中で、年中行事が家族の絆を深める役割を果たしているのでは、と考えたのがきっかけでした。

外部との多様なつながりが 面白さと成果を生み出す

— 先の研究所調査などを通じ、CELには当時、どんなイメージをもっておられましたか？

佐藤 所員がそれぞれ個性的でインパクトのある新しい研究をされており、すごいと思いました。のちに所長も務められた古館晋（18頁参照）さんとは個人的にも深いお付き合いがあったので、動向はいつも追っていました。1991年から十数年、KDD（現・KDDI）の望月清文「*4」さん主宰で「人間文化研究会」を2カ月に一度開いており、古館さんと私が幹事役でした。仕事というよりも、人と人のつながり。そんな

関係から、多くの研究の種が生まれたと感じます。それが私の見つけた研究スタイルでもありました。— 設立当初から、錚々たる研究者の方々と交わっておられた。

佐藤 当時はサントリー文化財団によるサントリー学芸賞（79年創設）が10年を超えた時期。「個性豊かで将来の期待される新進の評論家、研究者」に贈られる賞ということで、財団にはさまざまな分野の若手の研究者とのパイプができておりました。こういう方たちに助けていただき活動できた意味は大きいと思っています。

— 不易流行研究所の場合、皆さんはどのようなスタイルで研究をされていたのでしょうか。

佐藤 小さな研究所なので、外部のさまざまな方との共同研究というスタイルをとるのが基本でした。それでも、たとえば『変わる盛り場』— 「私」がつくり遊ぶ街』（1999年、学芸出版社）という書籍にもなった研究では、所員全員が参加して各地の盛り場に足を運び、それぞれが文章も書きました。

— 大阪ミナミの法善寺横丁やキタの阪急東通商店街、東京・神楽坂などを取り

上げ、盛り場が形成される歴史から、現在の人々のコミュニケーションまでをつなげた素晴らしいご研究でした。

佐藤 ありがとうございます。大阪大学工学部の教授を務められた鳴海邦碩「*5」先生の力で実現した法善寺横丁の悉皆調査はその後の2002年、法善寺横丁が火災に見舞われた際の復興にも役立ちましたと聞いています。

— 外部を巻き込むことを大切にされていたのですね。

佐藤 毎月の研究会は、さまざまな分野の研究者のお話を聴く社内の勉強会とし、社外向けのサロンはお世話になった方々をお招きし、旬な話題を提供、場所にも工夫し、懇親する場としていました。どちらも人脈形成という意味でも、研究所の大きな財産になりました。

— コミュニティをつくる仕事にもなっていたのですね。サロンというのは、どんな形式でしたか。

佐藤 テーマや開催場所も変え、年に一度は交流の場を、と始めました。DANCE BOXの大谷燦「*6」さんの舞台を訪ねたり、今や「アートのまち」として知られる北加賀屋に北川フラム「*7」さ

んをお招きして越後妻有での「大地の芸術祭」のお話をしていたり、ふだんは関わりがなさそうなテーマや場所を毎回探し、趣向を凝らして一緒に楽しんでおりました。

— CELでも外部ネットワークづくりをミッションとして掲げています。佐藤さんは研究所の設立当初から、いとも軽やかにそれを実行して、研究成果に結びつけられてきたことに驚かされます。

佐藤 組織で働くことも、人と協力しながら研究することも大好きでした。今も「地方の時代映像祭」「*8」で審査委員を務めています。そこでも人と出会い、新しいことを学んでいます。

あえて選んだ定性的調査と 社会への発信

— 研究の方法論やアプローチで工夫さ



れたのはどんな点ですか。

佐藤 マンパワー、予算の面でも大手シンクタンクや行政の調査と同じことはできません。ならばということ、定量的なデータの向こうを張り、日記の調査やエッセイの分析、インタビュー、特定の対象への定点観測などの定性的な調査を意識的に行っていました。たとえば先ほど話した「年中行事」研究は、日本の4地区に暮らす366世帯に協力してもらい、1年間の一行事一枚の記録を写真とともに集めました。大量の資料から地域差や年代差も含めリアルな実態が伝わってきました。

——旅や酒などをテーマにエッセイを一般募集されていたのは、そのような意図があったのですか。

佐藤 定量的な調査でわかるのは、「すでに皆知っている」ことです。一方、定性的な調査で同じテーマでも掘り下げていくと、潜在的ニーズや未来への種も見えてくる。もちろん、そのためには感度を磨かなければなりません。

——そういうノウハウはもともと、どなたがもっていらしたのでしょうか。

佐藤 年中行事の調査は文化施策

やライフスタイル研究で実績のあるシンクタンク(株)シー・ディー・アイさんと組むことで、複雑なモニター調査も可能になりました。密度の濃い研究には、ふさわしい相手を見つけて長く関係を保つことが大切だと思います。

——この研究も『現代家庭の年中行事』(井上忠司・サントリー不変流行研究所共著、1993年、講談社現代新書)という書籍になっています。

佐藤 多くの場合、研究の段階から本になったときの形もイメージし、ここぞと思う出版社を選び、話をもっていきました。生活研究は評価の難しい分野ですが、出版社が本を出してくれるということ、外部から評価されたこと、基準になりますし、研究所自体のステータスを上げることもつながります。研究報告を冊子にまとめるだけではなく、書籍として一般の読者に届ける。企画を通すのは簡単ではありませんでしたが、誰に届けるのか、というターゲットも含めて熟考しました。

——日々の暮らしの問題意識を出発点にして、一般向けのアウトプットを前提に研究を進めておられたのですか。

佐藤 たとえば世代によって年中行事のとらえ方も違う。「じゃあ、この世代っていうのは何なの？」という疑問も湧いてきます。そうした研究が『時代の気分・世代の気分』(1997年、NHKブックス)という本になりました。

——注目される研究の発信で知名度も上がり、政府や自治体などからの依頼事も増えましたか。

佐藤 たくさん声をかけていただきました。私自身も小泉政権の「観光立国懇談会」のメンバーや、文部科学省、国土交通省、環境省など審議会の委員になり、大変勉強になりました。東京との往復が大変でしたが、異分野の方との交流もでき、視野も広がり、研究・仕事のうえで、大変役に立ちました。

関心領域と視点の変化で世界規模の研究調査も

——不変流行研究所の場合、研究を続けていけるなかで、テーマの移行や拡大はあったのでしょうか。

佐藤 そうですね。研究をしているうちにおのずと、家族のあり方や、次世代をどう育てるかといった問題にも関心が移っていきまし

た。

——ご自身の関心ですか、それとも研究所のお仕事としてですか。

佐藤 自分事として興味関心ももてるテーマであることを大切にしました。たとえば未婚の所員が「マイシングル事情」といった研究をしてみたり、若い人たちの仕事への意識の変化を感じて、35歳以下の男性へのヒアリング結果を『U35世代 僕と仕事のビミョーな関係』(2005年、日本経済新聞社)としてまとめるなど。——CELの場合、企業内研究所で、生活者の視座を大切にすることがベースでした。

佐藤 私たちも、当初から生活者目線を前提に考えていました。たとえば98年から2001年にかけて、「これからの家族のために」と題した国際調査を行いました。アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、スウェーデン、韓国、タイの7カ国で世代別(20代から60代)の家庭へ訪問調査を行うものでしたが、国際比較を目的とした研究ではありません。歴史や伝統の違いを意識しつつ、今を生きる家族がどのような意識で暮らしている



佐藤氏が研究・執筆・編集に携わった書籍の数々(本文で紹介したもの)。a.『時代の気分・世代の気分——〈私がえり〉の時代に』(1997年、NHKブックス)、b.『変わる盛り場——「私」がつくり遊ぶ街』(1999年、学芸出版社)、c.『つながりのコミュニティ 人と地域が「生きる」かたち』(2011年、岩波書店)、d.『一人で思う、二人で語る、みんなで考える——実践!ロジコミ・メソッド』(2020年、岩波ジュニア新書)、e.『現代家庭の年中行事』(1993年、講談社現代新書)、f.『U35世代 僕と仕事のビミョーな関係』(2005年、日本経済新聞社)、g.『大人にならずに成熟する法』(2003年、中央公論新社)、h.『成熟し、人はますます若くなる』(2008年、NTT出版)

のかを学び、日本人の生活に生かすためのものでした。——興味深い内容です。こちらは出版されなかったのですか。

佐藤 子どもの自立や夫婦の関係、地域や学校のあり方など、今の日本でも参考になる事例が多かったのに、書籍化できなかったのは心

残りです。個人的にも子育ての指針になりましたし、私の人生や研究にとって大きな意味をもつ研究でした。

一方、1997年からは「成熟社会のライフスタイル研究会」として、造園学者の白幡洋三郎先生を中心に、専門分野の異なる驚

田清一氏、山極寿一氏、奥野卓司氏、小長谷有紀氏「*9」の5名に参加いただき、「成熟とは何か?」の議論を重ねました。『大人にならずに成熟する法』(2003年、中央公論新社)の題で本にもなっています。

成熟社会における次世代育成をテーマに

——不易流行研究所は、2005年3月に「サントリー次世代研究所」と名称変更されました。これは「次世代分野に特化した活動を行っていくため」とのことでしたが、どんな事情だったのでしょうか。

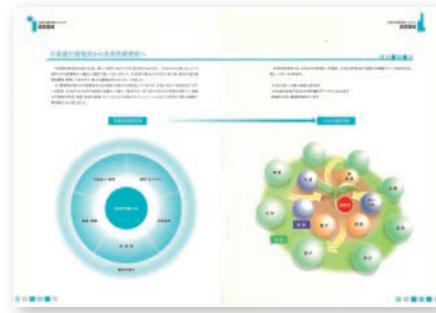
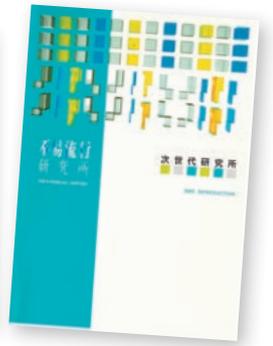
佐藤 研究所設立から10年くらいで、「生活の中の楽しみ」は一通りやりつくしてしまっただけがありました。また、もともと佐治敬三本人が所長を務める研究所であり、1999年に亡くなったからは、毎年のように所長が代わり、安定しませんでした。そんななか、2001年に鳥井信一郎社長の後をついだ佐治信忠社長がしばしば口にしていたのが「次世代育成」というキーワードでした。私たちは研究所の看板だけでなく、研究テーマの位置づ

けについても議論し、ミッションの再構成と組み替えを行ったわけです。でも、「存じの通り、サントリーは2005年にコーポレートメッセージとして「水と生きるSUNTORY」を正式に制定しました。

——そうしたなか、次世代研究所は惜しくも2008年で活動を終了されます。

佐藤 2003年に「天然水の森」という活動が始まりました。これはもともと環境問題へのアプローチでしたが、「水と生きる」は自然だけでなく、人や社会、そして社員にとっても不可欠なすべてを含んだ、素晴らしいビジョンだと思います。それで、正直「次世代研究所」としては、ひと区切りかな、と思いました。不易流行研究所の時代に「楽しみ」を研究し尽くした10年をはじめ、やるべきことはやったという気持ちでした。——その後、冒頭にご紹介いただいた90年の「生活研究最前線」レポートから15年を経て、「生活研究所の現在」という社内レポートをつくられています。

佐藤 電通総研のように自ら情報を生み出し、商品として扱えるような企業がある一方、本業のマー



2005年に「サントリー不易流行研究所」から「サントリー次世代研究所」へ、ミッションおよび研究テーマの再構成を行った際の年報。
提供／佐藤友美子

ケティングとの差別化が難しくなり、閉じた研究所もありました。サントリーの場合、会社を取り巻く状況や環境に合わせて商品のラインナップを変えるように、研究所も終了した。私自身、そこに異存はありませんでした。
——その後、佐藤さんはサントリー文化財団に籍を移されましたね。
佐藤 当初は次世代研究所の成果をまとめることを優先し、まずはその道を極めた先達19名に「人や社会が成熟するとはどういうことか」をインタビューした結果を

『成熟し、人はますます若くなる』（2008年、NIT出版）にまとめました。さらに、山納さんにもご参加いただいた元気な地域やコミュニティを現地調査した「共立のデザイン研究会」の成果は、『つながりのコミュニティ 人と地域が「生きる」かたち』（2011年、岩波書店）という本にまとめています。

大学という場で新たに 取り組む「成熟社会」研究

——2013年に財団を退職。追手門学院へお移りになり、「成熟社会研究所」をつくられると、初代所長にも就任されました（その後、20年度まで所長、21年度は所員として在籍、22年度に退任）。
佐藤 財団では、ふたつのプロジェクトを担当し、ひとつは出版に至りましたが、学者に伍して研究をする能力はないと悟り（笑）、次に行くことを決断しました。そこで追手門学院のお世話になったのですが、思いがけず学院から「不易流行研究所のような、自由な研究のできる新しい研究所をつくってほしい」という要請があったのです。

——学院側のリクエストだったのですね。
佐藤 初期メンバーは学院の教職員を合わせて5人。何をやる研究所なのか、創設ギリギリのタイミングまで考えました。
——これまで取り組んでこられた「成熟社会」の研究をさらに進める、ということでしょうか。

佐藤 ええ。でも、小さな研究所にできることは限られています。追手門学院の教育理念である「独立自強・社会有為」という言葉に触発され、自立して生きる「志」のある若者を育てるために、どうしたらよいか。若者の自立を支援できる社会環境について、あるべき姿を探ることにしました。

——先ほどの、家族や個人の自立のあり方についての調査「これからの家族のために」でも強調されていた、自立のための教育ですね。アカデミズムと企業内研究所の違いもあつたかと思いますが、どんな研究を進めてこられたのでしょうか。
佐藤 アカデミズムといっても、

国や大学が進める専門的研究などとは話が違います。大学で授業を行い、学生たちのプロジェクトを支援しながら研究課題を進めていく。とにかく忙しかったし苦労も

しましたが、若い人たちと一緒にやるのは楽しかったですね。

——企業での研究所時代のように、アウトプットを前提にした研究でしょうか。

佐藤 あまりそれは考えませんでした。学生が自ら動きセミナーを開催するなど、大人と関わりながら成長していくことが重要であり、成果を前提にすることには弊害もあるからです。ただ、アクティブ・ラーニングをスムーズに行うためのコミュニケーションと論理的思考のための補助教材の必要性は感じ、研究所の仲間と「ロジコミ・メソッド」[*10]というツールを開発し、改訂を続け、多くの人に使ってもらおうと、2020年に『二人で思う、二人で語る、みんなで考える——実践！ロジコミ・メソッド』（岩波ジュニア新書）として出版しました。

企業の生活研究の未来 そしてCELが進むべき途

——時代とリンクしながら、佐藤さんの興味も「生活の中の楽しみ」から「次世代」「成熟社会」へと変わりました。CELのような企業の生活研究が果たすべき役割も変わってきているはずですが。

佐藤 新聞を読まない、テレビも見ないという人たちが増えていきます。ますます便利になり、自分が考えなくても、AIが答えを提示してくれる時代です。そういう時代だからこそ、これまで以上に、違う意見に出会うことや皆で考える場が大事になると思います。

——過去よりも、未来のあるべき姿に目を向けるべきでしょうか。

佐藤 社会は確実に変わっていません。大事なのは、蘊蓄や教訓ではなく、「強い思い」ではないでしょうか。未来を切り拓くためには、変化を恐れず、易き道ではなく、遠回りしても、納得できる道を求める覚悟が必要です。それが自分らしく生きることにもつながると思うようになりました。

——立場や場所が変わっても、変わらぬバイタリティで研究と向き合う佐藤さんの姿勢に感銘を受けました。現在は大阪ガスの社外取締役もお務めですが、これからの私どもCELのあり方について、ご提言をいただければ幸いです。

佐藤 CELは個人の研究で世の中を驚かせてきた。今もそれは同じですが、研究所というチーム全体のパフォーマンスを考えると、

やはり「どこへ向かうのか」が大切と私は思います。小さな研究所ほど「拠って立つところ」、ミッションが大切です。私も少し考えてみたのですが、エネルギーというのものはものを動かしたり、音を出したりする「仕事をする力」のことです。エネルギーという言葉がもつ本来の意味を考えるなかにヒントがあるように思います。

——エネルギーという言葉の意味を再定義するのはですね。

佐藤 生活を守るだけでなく、人や社会を動かす……。私がこんなことを申し上げるのは、誠に僭越ですが。

——今の社会で「エンパワメント」と呼ばれているものなど、まさにそれだと思います。

佐藤 そんなアイデアもあるということ、よろしければ、これからも一緒に考えていきましょ。こんな風に、さまざまな方たちと垣根を越えた対話を続け、それを仕事にしてきました。ぜひ次の10年も頑張ってください。

——本日は、ありがとうございました。再び前に進むための元氣と勇氣をいただきました。

- *1 1976年、化粧を学術的に探究することを目的に設立された株式会社ポーラの研究所。文化としての化粧に関わる収集と保存、調査研究と公開普及を行っている。
- *2 1990年に大阪市で開催された国際博覧会。「花と緑と人間生活のかかわりをとらえ、21世紀へ向けて潤いのある豊かな社会の創造をめざす」をねらいに、世界83カ国と55の国際機関、212の企業・団体が参加した。
- *3 弟子・向井去来（きよらい）が師の言葉、一門の論議を記録した『去来抄』中に見える「不易を知らざれば基（もと）い立ちがたく、流行を知らざれば風（ふう）新たならず」が典拠。
- *4 1950年生まれ。KDD（当時）入社後、光ファイバー通信の研究に従事。89年より人間研究に従事し、96年にKDD総研取締役。2001年に、城西国際大学経営情報学部教授（2012年）。
- *5 1944年生まれ。大阪大学名誉教授、都市環境デザイン研究者、アーバンデザイナー。「アーバン・クライマクス」（1987年、筑摩書房）を中心とした業績で88年サントリー学芸賞受賞。
- *6 1952〜2025。ダンスプロデューサー、NPO法人DANCE BOX理事長、神戸アートビレージセンター（現・新開地アートひろば）館長。関西を中心に新進の振付家、ダンサー、制作者育成を行った。
- *7 1946年生まれ。日本を代表するアートディレクターとして、各地の美術館、企画展、芸術祭をプロデュース。2000年から開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では総合ディレクターを務める。
- *8 1980年から、日本放送協会、日本民間放送連盟、日本ケーブルテレビ連盟等が共同で主催する、地方文化を映し出したドキュメンタリー映像作品を対象としたコンクール。
- *9 白幡洋三郎（1949〜2022）造園学者／鷲田清一（1949年生まれ）哲学者／山極寿一（1952年生まれ）人類学者／奥野卓司（1950年生まれ）人類学者／小長谷有紀（1957年生まれ）文化人類学者。

*10 「マインドマップ」「マンダラート」などのツールを駆使し、ロジカルシンキングを基にしたコミュニケーションを行うためのメソッド。



佐藤友美子
（さとう・ゆみこ）
学校法人追手門学院理事、大阪ガス㈱取締役（社外）、立命館大学を卒業後、サントリー株式会社（現・サントリーホールディングス株式会社）に入社。89年にサントリー不易流行研究所の設立メンバーとなり、以降約20年間調査研究に関わったあと、サントリー文化財団に移る。退職後は、追手門学院大学地域創造学部教授、同大学成熟社会研究所所長などを歴任。生活文化の研究者として、多様なテーマ、さまざまなフィールドで調査研究、教育普及活動を行っている。



富尾博之
（とみお・ひろゆき）
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所所長。1993年、大阪ガス㈱入社。家庭用エネルギー部門で直営業、一般ガス事業者向けの天然ガス卸営業、業務用厨房機器の販売企画に携わる。その間、公営ガス事業者の買収業務にも従事。2022年から地域共創部門でDaigasグループの社会貢献活動を管轄。次世代教育（エネルギー環境教育・防災教育・食育）やさまざまな社会課題の解決に向けたNPO団体等との協働活動を推進。2024年より現職。



山納洋
（やまのう・ひろし）
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所所長代理・研究員。1993年、大阪ガス㈱入社。神戸アートビレージセンター（現・新開地アートひろば）、扇町ミュージアムスクエアなどの企画・プロデュース業務を歴任。2010年より近畿圏部にて地域活性化、社会貢献事業に携わったのち、2023年より現職。

2015	2014	2013	2012	2011	2010	2009	2008	2007	2006
<ul style="list-style-type: none"> 食と住まいの情報発信拠点「n-gwmuseum（ハクニエム）オープン」 事業所館内の全ての喫煙室を廃止 「大阪ガスクラスタ企業理念」を制定 作業服のデザインを30年ぶりに一新 	<ul style="list-style-type: none"> CSRレポートが「環境コミュニケーション大賞 優秀賞」を受賞 「大阪ガスクラスタダイバシティ推進方針」を公表 次世代教育「大阪ガスの防災プログラム開始」 「生活誕生館DILIPPA」閉館 	<ul style="list-style-type: none"> 「ガゼル」が竣工80周年 「NEXT21」居住実験第4フェーズ開始 シガポールにおいて初の海外におけるガス販売事業を開始 	<ul style="list-style-type: none"> グループ本社に「地域共創部門」を設置し、「近畿圏部」「エネルギー・文化研究所」「地区支配人」が移管 陸上競技部の江里口匡史選手がロンドンオリンピック出場 	<ul style="list-style-type: none"> 由良風力発電所「和歌山県」運用開始 「小さな灯」運動30周年 OMSA 戯曲賞、メセアワールド2011（メセナ大賞部門）で演劇としてもしび賞を受賞 	<ul style="list-style-type: none"> お客さま多数取付メーター数700万戸 	<ul style="list-style-type: none"> 市民が選ぶ「第3回CSR大賞2009」でグランプリを受賞 東北天然ガス発電所全4基が完成 	<ul style="list-style-type: none"> 北京オリンピックで朝原宣治選手が男子4×100mリレー銅メダルを獲得 広川明神山風力発電所「和歌山県」運用開始 	<ul style="list-style-type: none"> 次世代法に基づく子育て支援事業の認定を取得 「NEXT21」居住実験第3フェーズ開始 	<ul style="list-style-type: none"> CSR憲章を制定 葉山風力発電所「富山県」送電開始
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>第8代所長 小西池透</p> <ul style="list-style-type: none"> 「エネルギー・文化講座」都市魅力シリーズ（全3回） 大阪くらしの今昔館との包括連携協定 CELホームページ全面改訂 「書籍」和食の散歩道「見つけよう日本人のこころ」 </div> <div style="width: 30%;"> <p>第7代所長 木全吉彦</p> <ul style="list-style-type: none"> CEL設立25周年記念シンポジウム「人とつながりから持続可能な社会を実現する」 NPO法人LEAFとの共同研究 「第一次産業学習の社会デザイン」実践研究プロジェクト（14年） 「上町台地周辺およびNEXT21に関する一連の活動で「都市住宅学会賞」受賞 「書籍」上町学「再発見・古都おさか」 </div> <div style="width: 30%;"> <p>第6代所長 多木秀雄</p> <ul style="list-style-type: none"> CEL20周年 「ガゼル」に事務所を移転 「コミュニティツーリズム研究会」 「書籍」大阪まらブランド探訪「まちづくりを遊ぶ、愉しむ」団地再生まちづくり NEXT21「ファクター4」居住実験開始（12年） NEXT21「UCCORウインドウ・エキシビジョン」開始（12年） 「コミュニティ・デザイン理論と実践研究」〜現在 同志社大学寄附講座「コミュニティ・デザイン論」〜（10年） 「玉造黒門越瓜（しろうり）」ツルつなぎプロジェクト開始（現在） 「書籍」太陽エネルギー「有効利用最前線」料理のなんでも小事典 「書籍」大造黒門越瓜（しろうり）」ツルつなぎプロジェクト開始（現在） 「書籍」太陽エネルギー「有効利用最前線」料理のなんでも小事典 </div> </div>									
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>2013-2024</p> <ul style="list-style-type: none"> 「エネルギー講座」を「エネルギー読本」として冊子化 「減災講座」（全7講座） 「上町台地今昔フォーラム」（全20回）〜24年「同Document」発行（全20号）〜24年 「エネルギー」文化講座「NEXT21シリーズ」（全7回）〜17年 「なにかの語りべ」「語りベシアター」に名称変更 </div> <div style="width: 30%;"> <p>2013-2024</p> <ul style="list-style-type: none"> 「CEL」100号を発行 「季刊誌「CEL」リニューアル 「Facebook立ち上げ 「エネルギー講座」（全10回）〜14年 「書籍」地球温暖化とグリーン経済「火と食」 「季刊誌「CEL」リニューアル」 「都市魅力研究室」設置 「都市魅力研究室にて「なにかの語りべ」連続講座（15年）」 「実践的マーケティング」（24年） 「連載毎日新聞「日々色」（17年）」 「生活者の省エネルギーに関する意識について」調査 「書籍」カリスマ案内人「行く大阪まち歩き」大阪府誌解説版 「増補版上町台地つながりのスタイルブックUCCORプロジェクト5年の物語」 </div> <div style="width: 30%;"> <p>2008-現在</p> <ul style="list-style-type: none"> 「書籍」大造黒門越瓜（しろうり）」ツルつなぎプロジェクト開始（現在） 「書籍」太陽エネルギー「有効利用最前線」料理のなんでも小事典 「書籍」大造黒門越瓜（しろうり）」ツルつなぎプロジェクト開始（現在） 「書籍」太陽エネルギー「有効利用最前線」料理のなんでも小事典 </div> </div>									
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <p>2007-2024</p> <ul style="list-style-type: none"> 76号 都市のオルタナティブ・ツーリズム 77号 新しい居住スタイル 78号 生活者の格差論 79号 多様なエネルギーで豊かな暮らし 80号 まちづくりと地域ブランド 81号 食育の時代と家庭の食卓 82号 現代生活者の住まい・生活観2007 持続可能性と生活満足 </div> <div style="width: 30%;"> <p>2007-現在</p> <ul style="list-style-type: none"> 83号 生活者ができる地球温暖化防止 84号 パブリックスペースのたのしみ 85号 食育の時代と社会の役割 86号 2020年の生活像を考える 87号 水から見たエコライフ 88号 持続可能なハウジング「団地再生 89号 自立と共生の生活設計 90号 現代生活者の住まい・生活観2009 持続可能性と生活満足 </div> <div style="width: 30%;"> <p>2007-2024</p> <ul style="list-style-type: none"> 91号 生活者にとつての減災 92号 日々の暮らしから考える生物多様性 93号 つながりの原点「家族」を問う 94号 現代生活者の住まい・生活観2010 持続可能性と生活満足 95号 私たちの暮らしをつなぐ木の力 96号 持続可能な未来につなぐCSR 「のちのち」新しい潮流 97号 土のある暮らしと文化 98号 倫理的消費「持続可能な社会のアクション 99号 「人とつながり」から持続可能な 社会を実現する 100号 まつり「が育む地域の力 101号 賢いエネルギーの使い方「豊かな暮らしを 102号 ICTのエネルギーが社会をつなぐ 103号 スポーツが持つ「多様な魅力がOOLを 豊かにする 104号 余暇から本へ 105号 スロイな暮らし 106号 ソーシャルって何？ 107号 海の恵みをいつくしむ 108号 明日の食の「あたりまえ」 109号 居にこころのよい住まい 110号 幸せな地域の暮らしをつくる 111号 生活者から見る「スマート」 </div> </div>									
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 30%;"> <ul style="list-style-type: none"> 北陸新幹線開業（長野・金沢間） 改正ガス事業法公布（2017年）ガス小売全面自由化 2022年4月に法的分離 マイナンバー制度施行 </div> <div style="width: 30%;"> <ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災 FIFA女子WC、サッカー日本女子代表が初優勝 野田佳彦内閣発足 地上デジタルテレビ放送へ全面移行 ニージランド地震・ギンギン危機 ロンドンオリンピック開催 日本国内の全原子力発電所停止 テレビ放送のデジタル化完了 政権交代・第二次安倍晋三内閣発足 復興特別所得税の課税導入 大阪駅北地区「うめきた」先行開発区域 「大阪フロント大阪」が開業 2020年オリンピックの開催都市に東京が選出される </div> <div style="width: 30%;"> <ul style="list-style-type: none"> 北京オリンピック開催 リーマンショック 石油価格高騰 四川大地震 麻生太郎内閣発足 福田康夫内閣発足 高齢化率21%を超える超高齢社会に 日本郵政株式会社発足・iPS細胞作製に成功 年金記録問題や防衛省の汚職問題発覚 新潟中越沖地震 政権交代・民主党の鳩山由紀夫内閣発足 裁判員制度スタート 新型インフルエンザが猛威 世界人口70億人 菅直人内閣発足 コリア航空機墜落事故 「はやぶさ」カプセル帰還 中国のGDP世界第2位に </div> </div>									

2025	2024	2023	2022	2021	2020	2019	2018	2017	2016
<ul style="list-style-type: none"> 「NEXT21」居住実験 第6フェーズ開始 「NEXT21」居住実験 第5フェーズ開始 「NEXT21」居住実験 第4フェーズ開始 「NEXT21」居住実験 第3フェーズ開始 「NEXT21」居住実験 第2フェーズ開始 「NEXT21」居住実験 第1フェーズ開始 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 大阪・関西万博に日本ガス協会が「ガスナビリオン」おぼけファンダランドを出展（日本ガス協会の委託、出展準備および会場運営を担当） 「NEXT21」居住実験 30周年 「NEXT21」居住実験 20周年 「NEXT21」居住実験 10周年 大阪ガスが「NEXT21」居住実験 10周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 大阪ガスネットワークが事業開始 第1回トランジションポンドを発行 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年 	<ul style="list-style-type: none"> 「Dai gas グループ エネルギー トランジション 2030」を発表 「NEXT21」居住実験 10周年 「NEXT21」居住実験 5周年 「NEXT21」居住実験 1周年 「NEXT21」居住実験 0周年
<p>第12代所長 富尾博之</p> <p>第11代所長 金澤成子</p> <p>第10代所長 田中雅人</p> <p>第9代所長 池永寛明</p>									
<p>「商店街等のストック活用とコミュニティ再生に関する研究」(23年)</p> <p>「エネルギーよもやま話」連載(WEB)</p> <p>「歴史に学ぶエネルギー」連載(WEB)</p> <p>「街角をゆく」連載(WEB)</p> <p>「うめきた Talk About」(現在)</p> <p>「玉造黒門越瓜」ツルつなぎフォーラム</p> <p>「都市魅力研究室に家族型ロボット「LOVOT」導入</p> <p>「コミュニティ・デザイン新論」出版記念セッション</p> <p>「書籍」「コミュニティ・デザイン新論」</p> <p>大阪・関西万博ガスナビリオンでの「高齢者の社会参加と健康寿命の関連性について」共同研究</p> <p>「コミュニティ・デザイン新論」共編者が日本NPO学会賞を受賞</p> <p>大阪くらしの今昔館との共催事業「お出かけ今昔館」</p> <p>「新たな都市居住文化を育む、潜在的グリーンインフラの可能性を探る」研究</p> <p>「書籍」玉造黒門越瓜談を著する。育てる、食へる、つながる。楽しみを遺する(1冊子)</p>									
<p>「中京・風の舎」が「住まいのリフォームコンクリート国土交通大臣賞」(最優秀)を受賞</p> <p>大阪府中央公会堂開館100周年記念特別講演会で「語りベシアター」公演</p> <p>「健康・生きがい就業モデルづくり」の研究(24年)</p> <p>「書籍」地域愛を育てる物語のつくり方「語りベシアター」の魅力</p> <p>「コミュニティ・デザイン論研究」レクチャー・ドキュメント(WEB)</p> <p>「語りベシアター」シンガポール公演</p> <p>「オーブンダイアログ」の研究(24年)</p> <p>「日本型ビジネス創出モデル」の研究(24年)</p> <p>「書籍」「上方生活文化室」大阪の今と昔と、「これらと」</p> <p>「仕事に効くオーブンダイアログ」世界の先端企業が実践する対話の新常态</p> <p>「ポストコロナ検討会」</p> <p>玉造黒門越瓜をともに育てるインスタグラム「みんなの瓜畑」開設</p> <p>少し先の未来を女性の視点で解読する「未来フアリ」(24年)</p> <p>「書籍」おとなのための住まいカ・知識・経験・リテラシー</p>									
<p>112号 昔の暮らし</p> <p>113号 学びを学ぶ</p> <p>114号 外から「日本」を見直す</p> <p>115号 外に出て「日本」を見直す</p> <p>116号 ルネッセ「場」都市を問い直す</p> <p>117号 ルネッセ「交」交流つながらるを問い直す</p> <p>118号 ルネッセ「耕」文化を問い直す</p> <p>119号 ルネッセ「外」に学び、つくり出す</p> <p>120号 ルネッセ「外」に学び、つくり出す「アジア」</p> <p>121号 ルネッセ「今」これから</p> <p>122号 世代間をつなぐ「高齢社会を生きて知とは</p> <p>123号 地域と時間をなく「よき者の役割とは</p> <p>124号 異なるものをつなぐ</p> <p>125号 学びを変える「未来をつくりだす力</p> <p>126号 未来を創る「新しい住いのカタチ</p> <p>127号 未来を創る「新しい文化芸術のカタチ</p> <p>128号 未来を創る「新しい住いのカタチ</p> <p>129号 デジタル社会の歩き方</p> <p>130号 長寿社会の歩き方</p> <p>131号 持続可能な未来を考える</p> <p>132号 空き家・空き地とソーシャルデザイン</p> <p>133号 対話で変わる人と組織</p> <p>134号 ウォーカーの本質を考える</p> <p>135号 場つくりのその先へ</p> <p>136号 文化芸術にできること</p> <p>137号 伝えること/伝わること</p> <p>138号 伝えること/伝わること</p> <p>139号 伝えること/伝わること</p> <p>140号 伝えること/伝わること</p>									
<p>電力小売の全面自由化スタート</p> <p>藤井聡太、史上最年少16歳2カ月でプロ棋士</p> <p>北海道新幹線開通・熊本地震</p> <p>リオデジャネイロオリンピック開催</p> <p>国連、核兵器禁止条約採択</p> <p>九州北部豪雨</p> <p>「沖ノ島島」世界文化遺産に登録</p> <p>ガス小売の全面自由化がスタート</p> <p>気候関連財務情報開示タスクフォース(TCFD)による提言公表</p> <p>大阪府北部地震、西日本豪雨、台風21号など、西日本を中心に大きな被害</p> <p>北海道胆振東部地震</p> <p>働き方改革関連法施行</p> <p>千葉県、台風・豪雨で甚大被害</p> <p>第126代天皇即位、令和に改元</p> <p>消費税率8%から10%に引き上げ</p> <p>世界保健機関WHOが新型コロナウイルスでパンデミック宣言、初の緊急事態宣言発令</p> <p>英国、欧州連合EU離脱、電気事業の法的分離が開始</p> <p>菅義偉内閣発足、カーボンニュートラル宣言</p> <p>菅首相が2030年度に温室効果ガスの2013年度比46%削減目標を表明</p> <p>東京オリンピック、1年延期で開催</p> <p>ロシアがウクライナへ侵襲、ガス事業の法的分離が開始</p> <p>安倍晋三元首相が銃撃され死亡</p> <p>円安、資源高で値上げラッシュ</p> <p>知床半島沖で観光船沈没事故</p> <p>世界人口80億人</p> <p>新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が「5類」に移行</p> <p>GX推進法脱炭素成長型経済連携の円滑な移行の推進に関する法律成立</p> <p>LGの理解増進法施行</p> <p>消費税のインボイス対応講義書、制度開始</p> <p>米田オーナーAIの対話型AI「Cradle」普及</p> <p>能登半島地震発生、奥能登豪雨発生</p> <p>北陸新幹線延伸開業、20年ぶりに新紙幣発行</p> <p>パリオリンピック開催、石破茂内閣発足</p> <p>うめきた2期区域の先行打ちあき</p> <p>令和の米騒動、水素社会推進法施行</p> <p>日本国際博覧会(大阪・関西万博)開催</p> <p>マイナ免許証が運用開始</p> <p>出生数が統計開始以来初めて70万人を下回る</p> <p>高市早苗内閣発足(日本初の女性総理)</p>									

CELの歩み① 草創期 [1986～2000]

設立と摇篮の時代

——ビジョンの確立、『CEL』誌、ジオカタストロフィ研究と変化の予兆



多士済々の識者や執筆者が登場、所長対談などの企画が誌面を彩った当時の『CEL』誌。撮影／栗原論

ここからは、4章にわたりCELの40年間を振り返ってみたい。最初は研究所が設立された1986年から、世紀の変わり目に至る14年間。日本経済が空前の好況に沸いたのち、長い低迷に足を踏み入れていくこの時期に摇篮の時代を送ったCELは、何を指して生まれ、どのような体制でどんな成果をあげ、それは社内そして社会にどう受け止められたのか。CELの草創期とも言える時代に携わった3人の所長の事績を俯瞰しつつ、その歩みを跡付けていく。

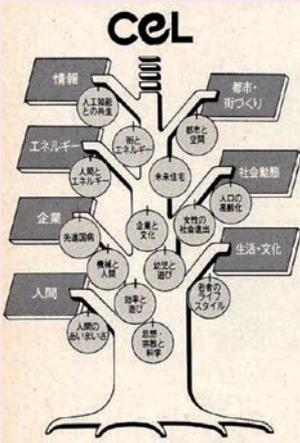
エネルギー・文化研究所 (Research Institute for Culture, Energy and Life (以下CEL))は、1986年4月1日、大阪ガス株式会社の企業内研究所として設立され、事務所は大阪市東区(現・中央区)平野町の大阪ガス本社ビル(以下ガスビル)内に設置された。

その設立は、前年の1985年に80周年を迎えた大阪ガスの記念事業の一環として計画。85年10月に設立準備部としてスタートし、半年間の準備期間を経て4月1日に発足した。準備部設置前には、「大阪ガスの今後の活動の方向づけ、展開に大きく資するために、未来のあり

姿」について考える特別の体制をつくるべきではないか」との当時の経営陣の指示のもと、社内横断メンバーによる「未来研究のあり方、その体制について検討会」で検討が進められた経緯がある。

当時のメモによると「ひとつの専門的組織を作るのが効果的」とあり、方策として研究室の設立を提言。その際は、情報 (communication)、エネルギー (energy)、生活 (life) の三つを柱とすることが望ましいとされ (この communication がのちに culture に代わって CEL となった)、机上の研究にとどまらず「外」へ出かけて体験し、内外の人と討議するなかから「外」と「先」の動きをつかみ、それを自社の企業活動、事業展開に反映するように働きかけていく「動きのある集団」がイメージされていたようだ。

こうした流れを受けて、設立された「CEL 設立準備部」は、のちに初代所長となる倉光弘己 (当時は新分野開発部部長補佐) が部長に就任。ありきたりではなく、リアリティのある社会を俯瞰した研究所を目指し、ビジョン策定のため



設立当時のCELが掲げていた研究分野とテーマ例を示した図。

の議論が深められていく。

初代所長・倉光のビジョンと CEL 命名に込められた意味

倉光が所属していた新分野開発部は、1978年に新分野開発室として発足。都市ガスの原料を石炭や石油から液化天然ガス (LNG) に全面的に転換する事業が完了し、「第二の創業」に踏み出した当時の社内において、長期経営戦略のひとつとして進められた「経営の多角化」の最前線であり、新しいことに挑戦する情熱家や起業家精神旺盛な人材が数多く在籍していた。そのただなかで進取の気性を磨いた倉光は、CEL 設立に賭ける思い、掲げるミッションを、当時の大阪ガス社内誌『がす燈』(以下『がす燈』) や『CEL』誌のなかで次のように語っている。

「十年後、二十年後の将来の魅力ある地域社会をどうつくるか、その中で心豊かな人びとの生活はどうあるべきか、さらにはその中での企業の役割・姿勢は——といったソフトサイド、ヒューマンウェアの研究を専門的に行う(中略) エネルギー・文化研究所 (CEL) というわけです」(『がす燈』1986年5月号)

「多くの企業の研究所は、(中略) 大概技術研究所であるのが現状です。(中略) そうした中で、社会科学分野でも自然科学分野でも、必要があれば統合した視野の中で中長期的な研究を進め

ようとする CEL のあり方は、他に例をみません」(1987年2月・『CEL』1号)

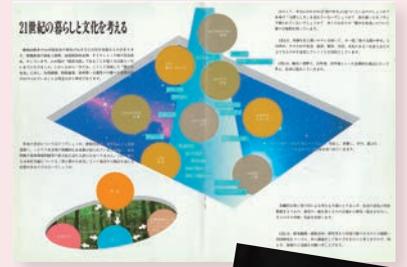
当初、情報・エネルギー・生活研究所 (CEL) とされていた名称も、設立準備部設置の際には CEL すなわち「エネルギー・文化研究所」となっており、これについては——

「CEL はカルチャー・エネルギー・ライフの略ですが、このエネルギーは必ずしも物質・エネルギーに限らない。人間の活力や、社会のエネルギーなども含んだものとして考えたい」「もともと CEL の C はカルチャーではなく、コミュニケーション、すなわち「情報」であったのですが、(中略) 情報と生活を「文化」と丸めてしまったのです」(1987年2月・『CEL』1号) と、倉光自らが込められた意味を語っている。

研究体制と暗黙のルール 創造の場としてのオフィス

かくして設立した CEL は専任の研究員が7名、兼務者が13名という陣容で、全員が大阪ガス社員。兼務者は、企画、技術、ガス製造、情報システム、新規事業など多様な分野のメンバーで構成されていた。

当初は自主テーマと各部門からの委託テーマの2種類の研究を進めるとされ、「エネルギー」「生活、ライフスタイル」「街づくり、未来住宅」「文化」の4つの研究領域を自主テーマに



1994年に発行、当時の体制や研究領域を紹介した研究所のパンフレット。



設定。研究者はグループとしてのテーマのほか、個人としてのテーマもち、「10年後から20年後の社会を良くするための研究」であれば、細かな内容は問われなかったという。

設立1年3カ月を経過した1987年の『がす燈』には、「現在、8名の専任研究員が「変わりゆく労働意識」、「21世紀の住まいと家族」という2つの研究テーマに取り組んでいます。また、各研究員はそれぞれの関心領域に応じて「近畿の未来」、「街づくり・空間と人間」、「高齢者社会における生活・経済・文化」、「子どもと遊び」、「機械と人間の関わり方」、「科学の進歩と人間性」、「若者のライフスタイルと価値観」のテーマについても研究」（『がす燈』1987年7月号）とあり、それぞれのテーマは1〜2年をかけて取りまとめる予定とされている。

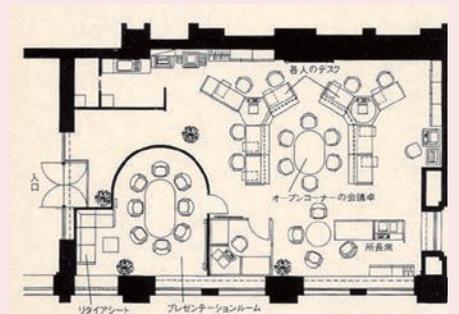
多様で幅広いテーマ範囲であるが、一方で重視されたのが「視点を外に置く」ことと「フィールドワーク」だった。そこに働いたのは、大阪ガスの立場を離れ、一生活者の視点を

大切にするスタンスであり、所長の倉光も社員に対しては常に「ガス抜き」と「人脈づくり」を強調していたようだ。そうした点は、先にあげた『CEL』誌や『がす燈』で倉光自身が記した「企業の研究所としてのCEL」「研究所名に込めた思い」とも符節を合わせている。

日々の研究の「足場」となるオフィスのレイアウトも斬新なもので、各人の机が会議卓を囲むように配置され、そこで交わされている議論が面白ければ、誰でも参加できるようにになっていたほか、パーテーションで区切られた会議室型の部屋では議論に疲れたとき、内容を聞きながら休憩ができるリタイアシートも設けられていた[*1]。こうしたユニークなオフィスづくりを、倉光はチャレンジと実験・実証、そして自ら渦中に飛び込んでいく各メンバーの心意気を示すものと位置づけており、これまでの常識を排する意識を形に表しつつ、従来の「事務処理の場」から「創造の場」への進化を目指したことがうかがえる。

『CEL』誌の創刊と編集者としての想い

『CEL』誌は研究所設立の翌1987年2月に創刊し、官庁、研究機関、有識者などに5000部を配布。現在まで138号を数えている。当初は年4回の季刊誌として、101号（2012年度）から年3回、131号（2022



ガスビル内に設立された当時の研究所のオフィスレイアウト。各人のデスクに囲まれるように会議卓があり、誰でも議論に参加できるようになっている。

年度）からは年2回発行に変更となった。

創刊当初の4号は特集テーマを「火」「水」「土」「気」とするなど野心的なもので、人文諸科学の研究者や作家、芸術家と誌面に登場する識者や執筆者は多士済々。そこには理論と教育ではなく、フィールドワークに裏付けられた研究に基づく「社会に対する提言」こそ大切であり、人間も企業も理屈よりロマンに対して大きなエネルギーを発揮する——その模索を重ねるため研究所内外の知見や提言をまとめて届けたいとの研究所としての想いがあった（創刊号の「CELからのメッセージ」より）。

当時は、先行する上質な企業PR誌として日本IBMの『無限大』やポラーラの『i's』などがあり、また倉光自ら強く持っていたという文化人類学への興味も前述のような多彩な顔ぶれの起用へとつながったのだろう。そのあたりの意気込みは、対談記事中の倉光の次のような発言にも見て取れる。

「文化というものは、(中略)真・善・美といったことに、ひたすら心を遊ばせるものだと言われますが、私たちのCELはまだそこまで行き着いていない。もっと早く、もっと便利に、もっと沢山、もっと安くといった方向で進んできた現代文明、もしくは企業活動というものを、もう一度見直してみたいと考え、そういう視点でこのCELを作っているのです」(1988年4月・『CEL』6号)

創刊当時、毎号の編集に当たって所長である倉光とのタッグで実務を担ったのは、新分野開発部に在籍し、CEL設立準備部メンバーから93年6月までCEL兼務だった服部信彦。服部は、85年12月に大阪ガス100%子会社として設立された関西ビジネスインフォメーション(以下KBI)の設立メンバーでもあった。KBIの事業内容には、「エネルギー、新技術、都市、住宅、生活関連等の書籍・雑誌等の出版および販売等」があげられており、KBI内部に設けられた出版事業部が『CEL』誌の編集を担当。88年には、PR研究会の主催する「全国PR誌コンクール」で最優秀賞も受賞している。

倉光と服部の二人は毎号、クオリティの高い誌面づくりを続けていくとともに、倉光による所長対談など連載記事の書籍化や研究員執筆による本もKBIから多数出版(44頁参照)。一方で、研究員の文が『CEL』誌の誌面を飾ることはあっても、研究成果報告という位置づけではなく、所長の倉光のクオリティコントロー

ルのもと、許される基準以上の内容にまとまったと判断したらレポートとして掲載される——その意味で、特に新人研究員には『CEL』誌への掲載がひとつの登竜門だったようだ。

人類滅亡回避のシナリオ ジオカタストロフィ研究

前述の通り、設立時にガスビル内に置かれたCELの事務所は、その後、1989年10月に北区茶屋町へ、93年12月には梅田の阪急グラウンドビルに移転している。これには有識者が集まりやすい場所に出て行き、社外でのネットワークを充実させたいという倉光の思いが反映されていた。

並行して、倉光は87年4月に「2001年研究会」を発足。これは大阪大学経済学部の中谷巖教授(当時)を主査に、少壮気鋭の学者とCELのメンバーからなる共同研究グループであり、各界で活躍するゲストを交えて毎月1回、21世紀の社会・生活・企業について常識にとらわれないユニークな議論を展開した。

こうした試みを経て、設立5年を迎えた91年には、「基本問題研究」「都市問題研究」「暮らしと住まいの研究」の3グループに分かれての研究体制がとられている。なかでも、この時期「基本問題研究」で最も注力したのが「ジオカタストロフィ研究」だ。

ジオカタストロフィとは「地球の破局」を表

す造語で、ジオカタストロフィ研究は、人類がこのまま欲望を肥大させ自分勝手な行動を続けていると、99年後には人類滅亡の可能性があり得ることを科学的にシナリオ化しようとするもの。89年に倉光が参加した一般公開のパネルディスカッションにおいて、登壇していた情報工学者の坂田俊文(*2)氏と地球物理学者の松井孝典(*3)氏の二人から、人類が最悪の場合あと100年で滅亡する可能性を聞かされたのがきっかけとなり、CELの提案による「ジオカタストロフィ研究会」結成へとつながった。

アウトプットとして研究所の設立5周年記念と銘打った国際フォーラム、裁判劇の形をとったパネルディスカッションが91年11月に大阪、



右/研究所の設立5周年記念として開催された、国際フォーラムの際のパネル展示。左/同フォーラムにて発表された「ジオカタストロフィ研究」をめぐる研究報告の様子。



上／裁判劇のスタイルで行われた「ジオカタストロフィ研究」のパネルディスカッション。中央の裁判官役は初代所長の倉光弘己。下／劇中では研究会のメンバーが「人類滅亡という言葉で人々の不安をあおった罪」で被告となり、検事役や弁護士役の著名研究者たちと議論を交わした。

92年3月に東京で開催されると、多数のメディアがこれを紹介。描かれたシナリオは91年の『CEL』誌18号で特集されたのち、上下巻各144頁のムック本としてNHK出版から一般向けに刊行されるとともに、報道番組『筑紫哲也NEWS23』[*4]（当時）でも採り上げられるなど、大きな反響を巻き起こす[*5]。こうした多くの実績を通じ、研究所の礎をつくった倉光が大阪ガスを定年退職して、神戸大学経営学部教授に転じたのは94年のこと。倉光のもと、自身のライフワークとも言えるべき「語りベリシアター」へとつながる「なにわの語りベリシアター」[*6]を始めた研究員の栗本智代は、初代所長の思い出を次のように語っている。「私が言われたのは『お前はガス抜きをしろ』でした。私は商品開発部から来たんですが、逆に『あなたはマーケティングの研究をしてはいけません』とも言われました。そこには、まず

生活者のスタンスに立つこと——という倉光ならではの明確な意図があったのだと、今振り返って思います」

国際派の第2代所長・山藤に受け継がれた問題意識

1994年6月、倉光の後を受けて山藤泰が第2代所長に就任する。企画部、ロンドン事務所長、国際部長などを務めた生粋の国際派であり、それまでCELとの関わりは比較的少ない。一方で海外経験が長く、すでに環境問題に対する注目が高まっていたヨーロッパの状況を知っていただけに、倉光前所長の問題意識は確かに引き継がれたようだ。

「研究所の活動に一つのエポックを作ったのは、（中略）『ジオカタストロフィ研究』を裁判劇に組み替えて世に問うたことであろう。（中略）前所長である倉光弘己氏（現神戸大学経営学部教授）のプロデュース能力に負うところが大きく、二年前に仕事を引き継いだ私としては、彼の訴求力を簡単に引き継ぐことができないのは残念である」（1996年9月・『CEL』38号）と一歩下がりがつつも、「しかし、問題意識については同じである」（同）と明言。ジオカタストロフィ研究でも協力を得たワールドウォッチ研究所[*7]のレスター・ブラウン所長を環境シンポジウムに招聘し、CEL10周年記念特別講演「持続可能な発展への挑戦」を実現するなど、在任

中を通じ、環境負荷の抑制や省エネルギーのための地域分散型エネルギー利用の研究などに積極的に取り組んでいく。

国際通の山藤はまた、以前の『がす燈』で「特に日本人は、自分の知らない世界を知ることが大切なんです。日本を通ることは世界でも通ると、本気で思っている人が多いから。（中略）でも、実際に知りたくても本がないんですよ」（『がす燈』1989年10月号）と発言しているように、環境問題のリテラシーについても深く考えるところがあったのだろう。アメリカの環境保護NPO代表であるアラン・ダーニングの著書『どれだけ消費すれば満足なのか』（ダイヤモンド社）（44頁参照）の邦訳などにも従事。先端技術にも明るく、いち早く研究所のホームページを立ち上げるなど、のちにつながる情報発信にも功績を残している。

第3代所長・古館の就任がCELにもたらした活力

1998年4月に、第3代CEL所長として古館晋が就任する。CEL設立準備部時代に研究所の立ち上げに関わり、開設後は副所長兼研究員として倉光、山藤両所長のもと、組織を下支えた古館はまた、住まい・暮らし・歴史についての論考を数多く残した、いわば研究所生え抜きの所長でもあった。

所長就任以前から、社内外のさまざまな活動



上/レクター・ブラウン氏を招いて行われた、CEL10周年記念特別講演「持続可能な発展への挑戦」の様相。右下/第2代所長を務めた山藤泰（1994年撮影）。左下/第3代所長を務めた古館晋（1998年撮影）。

にコミットしてきた古館は、各方面からの相談に乗る人望の厚い人柄だったという。多くの媒体への執筆はもちろん、ラジオ大阪の『住まいの110番』（大阪ガス住まいの相談センター提供）のコーナー「住まいと暮らしの提案」（当時）を倉光はじめ他の研究員とともに、長きにわたって担当。その他、産官学共同の研究会や大学の寄付講座・公開講座の講師など生活文化分野で幅広い活動を行い、93年に建設された大阪ガスの実験集合住宅「NEXT21」では構想の段階から参画したほか、「大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）」[*8]にも当初の構想委員として加わっている。

当時注目を集めていた企業フィランソロピーの面でも、大阪工業会の社会・文化小委員会の委員長として、大阪大学経済学部での公開寄付講義「フィランソロピーの理論と実装」の実現にも尽力してきた古館は、大阪ガス社内での企業ボランティア活動「小さな灯運動」[*9]の展開、「いきいき市民推進室」[*10]の組織づくり

に寄与。社外でも、持続可能な地域づくりを基に子どもたちの育成を多様な角度で支援する、兵庫県西宮市のこども環境活動支援協会「LEAF」[*11]（1998年設立、2002年NPO法人化）の立ち上げと運営に尽力するなど、古館ならではの多彩なネットワークが当時の研究所にもたらした活力には少なからぬものがあつた。

一方、古館所長の時代は、それまで社外に向けて研究活動を発信してきたCELが、大阪ガス社内への提言や貢献を求められるようになった時期でもある。これに伴い、研究所内でもエネルギー・環境・社会経済分野の研究への一層の取り組み、そのための人材面の充実などがはかられた。

この時期はまた、経営調査室に籍を置き経済に強く、のちの「CEL生活意識調査」（22頁）で専門性を発揮することになる豊田尚吾、くわえて、住宅・都市整備公団（現・UR都市機構）を退職後、大阪ガスに転職した濱恵介の配属も実現。この点、人事畑の経験も豊富な古館は初代所長・倉光のようなカリスマ的な存在感で対外的認知を高めるのではなく、個々の所員がそれぞれの領域で外に認められ、それによって社内からも評価される——そんなCELのあり方を模索していたようだ。こうした人事面の充実、研究分野の広がりという点でも「生活者」としての視点をより重視する、以後のCELの活動の原動力となっていく。この時期、副所長として古館に伴走していたのが、のちに

所長となる安達純であった。

「頂門の一針」という言葉がある。頭上にある急所に1本の針を刺すという意味から転じて、相手の急所をおさえて教え諭すという意味だが、当時、ある役員がCELに寄せる期待をこう表現したときされる。いち早く外の世界を見て社内
に忠告を与える存在たれ、との声は確かに的を射てはいるが、実行となるとけっして簡単ではなかつただろう。

注

- *1 このレイアウト自体、研究員・隅野哲郎の実践的研究であった。
- *2 「1931」〜2020 東海大学名誉教授。人工衛星による地球観測や解析等、画像処理工学における第一人者。
- *3 「1946」〜2023 千葉工業大学学長。東京大学名誉教授。日本の惑星科学の第一人者として、学際的な地球学を唱えた。
- *4 「1989」10月から2008年3月末まで、TBS系列（関西ではMBS）で平日23時台に生放送されていた報道番組。
- *5 ジオカタストロフィの詳細は、「CEL」誌18号を参照。
- *6 「語りベシアター」の概要は、「CEL」誌136号の連載「CEL」を振り返る（40頁）を参照。
- *7 1974年に設立された、アメリカの民間環境問題研究所。地球と人類の生存基盤を脅かす地球環境の破壊、人口爆発、資源の枯渇、食糧不足など重大問題の実態報告、現状分析、将来予測などを行う。
- *8 大阪市北区天神橋に2001年4月に開館。「住まい」を中心に「暮らし」から「まちづくり」までをテーマとする、歴史系ミュージアム。大阪の都市居住の歴史を楽しく学ぶとともに、「住むまち・大阪」に対する愛着とイメージアップを図る。
- *9 1981年の国際障がい者年に始まった、Daijassグループの企業ボランティア活動。「私たち一人ひとりが身近なことに関心を持ち、地域社会のさまざまな問題の解決に自らの意思で積極的に関わり組んでいこう」との趣旨のもと、社員たちが自主的に活動を企画し、参加し、続けていくのが特徴。
- *10 1991年、社員の自発的な地域貢献活動や文化活動を推進するため人事部内に設置、あわせて「小さな灯運動」事務局も移管され、バックアップする体制が整った。
- *11 持続可能な地域づくりを基に、次の時代を生きる子どもたちの育成を多様な角度から支援。地域の環境学習活動の支援、自然環境センターなど環境学習施設の管理運営などを行っている。大阪ガスとは「つながる展」などを通じ、長く支援関係にある。

CELの歩み② 中興期「2000〜2016」

時代の波と向き合う

研究領域の再定義、チーム力、コミュニケーション戦略と「大衆化」路線



リニューアルも含め、読みやすく、親しみやすい誌面づくりを進めた当時の『CEL』誌。撮影／栗原論

CEL草創の時代に続く2000年から2016年は、日本経済が長い低迷に沈んでいた時期にあたり、そのなかで研究所の位置づけや体制、研究領域、その手法や戦略なども少しずつ変化を遂げている。困難なマネジメントに当たった5人の所長の取り組み——特に第6代の多木所長、第7代の本全所長またのインタビュを通じて、前代から変わったもの、変わらなかったもの、さらに次代へとつながるさまざまな実りを振り返ってみたい。

バブル崩壊後の長引く景気低迷を受け、2000年以降、従来の「日本型経営」の転換を迫られる形で構造改革が本格的に進められた。大阪ガスをはじめとするエネルギー企業も例外ではなく、都市ガス業界では、これまで認められていた供給区域内での独占販売が、1995年から段階的な自由化が進むことで、競争環境に置かれることとなった。

こうしたなか、設立当初からプロフィットセンターとは一線を画してきたCELに対しても、どうあるべきかという視線が向けられたのは当然とも言えよう。研究所として充実を迎えたこの時期はまた、歴代の所長にとって時代の波とど

う向き合うかが問われた困難な時代でもあった。

矛盾・相反するものに架橋する 「生活者」という視点の再発見

営利企業にあって外からの視点を大切にし、ガス会社にありながら文化の研究も行う——1998年の古館晋所長就任時に研究所へと異動後、副所長として伴走した安達純は当時のCEL独特の立ち位置や役割を、『CEL』誌の中で「大阪ガスが未来社会と出会うための『通路』でありたい」と表現するとともに、その難しさを「迷路」にもたとえていた。

関係がないように見えるもの、相反するもの間に「通路を見つけ、調整し」「高め合う関係へと転化していくこと」を求める。「成長と環境、組織と個人、官と民、ハードとソフト、規制緩和と自己規制(自由と規律)等々の関係も同様です」(1998年8月・46号)とも記している。

進むべき道の多難さに苦悩しながらも、矛盾や相反のなかに「通路」を見つけることに、積



上/第4代所長を務めた、安達純(2000年撮影)。



下/第5代所長を務めた、真名子敦司(2004年撮影)。

極的な意義を見出そうとしていたのだろう。2000年4月、第4代所長に就任すると、安達は早速、『CEL』誌で「今、CELが問う」と題した4回にわたる特集(2000年6月・53号、2001年3月・56号)を企画。それぞれ「都市」「住まい・生活」「環境」「エネルギー」にスポットを当てている。

それは、この4分野をCELにおける主要研究領域として再定義し、社内外のバランスを取りながら設立以来の役割をしっかりと果たしていこうという、いわば新所長としての「意思表明」だった。この時、『CEL』誌の編集長を任されたのが、現研究員の弘本由香里である(以後、2012年3月・100号まで)。

「それまで『CEL』誌の編集に所員が関わることはほとんどありませんでした。安達所長のもとで初めて、担当研究員が毎号のテーマ設定を決める話し合いにも参加し、それぞれが分野ごとにネットワークを構築するため、役立てるようになっていくのです」と弘本は当時を振り返る。弘本はまた、この頃から研究発表の場としての『CEL』誌の役割が強まったとも指摘する。所員は『CEL』誌に「書く」ことで、読者に自らの研究がどう届くか、否応なく意識させられることになった。

2001年9月の58号の特集は「生活者再考」であった。そこでは安達が自ら書いた原稿中で、この言葉にあらためてスポットを当てている。「企業サイドに求められるのは(中略)、自ら

考える望ましい『生活者』像を社会に発信することであろう」

生産者と生活者の間で引き裂かれてしまいがちな現代人のありようを、「生活者」を見つめ直すことで取り戻したい。社会・企業・行政と生活者の間、あるいは過去から現在そして未来へと橋を架ける視点こそ、かつて求められた「頂門の一針」(19頁参照)であり、企業内研究所としてのCELにできる会社への貢献である——困難な舵取りを任せながら、安達は組織の未来を真摯にそう考えていたのではないか。

チームとしての力を高めた 「生活意識調査」への取り組み

そんな安達の後を受け、2003年2月、真名子敦司が第5代所長に就任する。

国際的な経験も豊富な「技術屋」であった真名子は、就任にあたって基本的な方針は前任者の路線を引き継ぎつつ、「社内のみならず他の研究機関や行政、大学、NPOをはじめとする社外の関連機関・組織との連携や協働を一層強化する」(2003年6月・65号)と、CELの研究活動が周囲から孤立しないために力を尽くす姿勢を明らかにした。

なかでも重視したのは、社内連携を深めること。さらには「チームとしてのCELにできること」を追求した。2003年4月、安達所長時代の計画を引き継ぎ、梅田からガスビルにほ



当時の研究員から4人が表紙を飾った、Daigasグループ報『がす燈』2005年1月号。左から山下満智子、弘本由香里、豊田尚吾、演惠介の面々。

ど近い「アーバネックス備後町ビル」に拠点を移したことで、CELは物理的にも本社と連携しやすい位置を得る（その後、数度の移転を経て現在はガスビル内にある）。

それまでのCELは、個性をもった研究員が独自のテーマを追求し、「よくも悪くも個人商店的」と評されることもあった。そこに「チームとして」の活動を意識的に導入しようとした真名子のもと、2005年1〜2月に行われたのが、「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」である。

この調査は、パネル調査として経年的な変化を見ることに重きを置いて始めたもので、「エネルギー」「環境」「都市」「住まい・生活」の4つの研究領域で研究に取り組んでいた研究員がそれぞれの問題意識を持ち寄って設問を組み立てた。さらに、詳細分析や考察は所員が主体となって実施。なかでも豊田尚吾研究員（19頁参照）は、専門知識と高いスキルで独自の分析を行うとともに、チームの中心となった。

工夫をこらした設問も、以前から大切にして

いる生活者視点、長期的視野、多分野横断といった特性を活かした多岐にわたる内容。持続可能な社会へのパラダイムシフトが求められるなか、生活者はどのような意識をもち、直面している課題を乗り越えていくには、どうすればよいのかを探るものになっている。

以後、2012年まで8度にわたって行われた本調査と並行して、2005年から2016年にかけてネットアンケート「ライフスタイルに関するアンケート調査」も実施。両調査を重ね合わせた分析も行われて、これら「CEL生活意識調査」は、CELにおける後の実践にも大きな影響を与えることとなった「*1」。

社内と社外をつなげるための「コミュニケーション戦略」

社内外への貢献、そして研究の意義といった面を意識しながら続いてきたCELへの評価は当時、どんなものだったのか。第6代所長・多木秀雄（2007年6月〜2011年3月）は今回の取材で当時の印象を次のように振り返っている。

「独自性のある研究だけでなく、築いてきた有識者ネットワークも非常に強く、とりわけ社外の評価は高かった。それに比べると社内では、CELの活動がそれほど知られていないと感じていました」

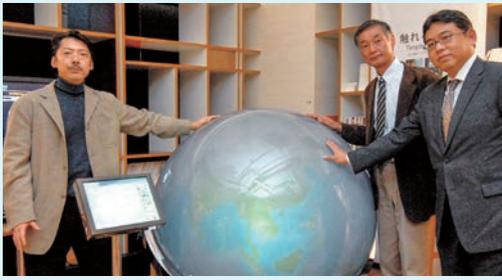
こうした問題意識に立った多木もまた、安達



今号の特集のため、自身が所長を務めた当時のCELについてインタビュー取材にこたえる第6代所長の多木秀雄。撮影／宮村政徳

や真名子と同じく、CELが「総合力」を発揮するためのマネジメントに注力した。CELに異動する10年以上前、1990年代にはイギリスの王立国際問題研究所（チャタム・ハウス）へ派遣され、エネルギー問題を研究していた異色の経歴をもつ多木は、所長としての仕事を「キャリアの集大成」「経験を生かして恩返しできる機会」と捉え、腕を撫す思いだったという。「チャタム・ハウスは、各国の相互理解の不足により第一次世界大戦が起きてしまった反省をもとに設立された政策シンクタンクであり、何より『対話』を実践してきた組織です。あまたのカンファレンス、シンポジウム、ワークショップ、あるいはラウンドテーブルのディスカッションが開催され、私自身も専門とは直接の関係がなくても参加していました。スケールは違っても、チャタム・ハウスの組織運営をCELにも生かせるはずと考えたのです」

多木の「コミュニケーション戦略」は、これまで培ってきた研究会やシンポジウム、セミナーなど、外部有識者とCEL研究員による討論



上/イギリスの国際NGOであるアカウンタビリティを訪ねた多木。提供/多木秀雄。下/「触れる地球」を前にして。左から竹村真一氏、濱恵介・清水英範の両研究員。2008年1月・『CEL』誌83号での座談会取材にて。

の場を意識的に広げ、それを大阪ガス社内にもつなげていく試みであった。そのためにウェブサイトの更新頻度を上げ、さらにイントラネットを用いた社内への発信も強化していった。

たとえば2007年12月のCEL研究会では、大阪ガスおよび関係会社社員を対象に、「地球環境問題とライフスタイル」をテーマに文化人類学者の竹村真一^{【*2】}が「触れる地球（2005年グッドデザイン賞・金賞）」を持ち込んでの講演を行っている。それを聴講した営業担当部署や広報部が気に入り、のちには「ガス科学館」「姫路ガスエネルギー館」^{【*3】}での展示にもつながった。

この時期にはまた、研究員が公的な審議会や委員会、プロジェクトなど、幅広い政策分野・プロセスへの参画に協力を求められる機会も増

えている。公平で中立的・専門的な立場、さらには市民・生活者目線が評価されることであり、そうした対外評価は間接的に社内での評価を得ることにもなっていた。

海外NGOや研究所との対話で 多様なCSRのあり方を模索

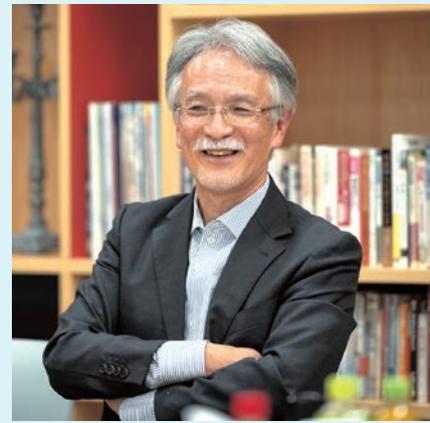
多木自身も、多くの人々に出会うことで、内外の「コミュニケーション戦略」を積極的に推し進めている。象徴的なのは2009年から2011年にかけての3回、自ら海外のNGOやNPO、研究所、大学やシンクタンクに出向いたことだろう。気候・環境・エネルギー分野で有名なドイツのヴッパータール研究所やアメリカのハーバード・ビジネス・スクールなど、CELの研究テーマに合う優れた研究・実践を行っている団体を厳選し、自分たちの研究成果をプレゼンしながら意見交換を行った。チャタム・ハウス時代に学んだ「対話」の実践アプローチや研究テーマを探るとともに、情報交換のためのネットワークづくりを進めたのである。とりわけ多木が注目していたのはCSR^{【*4】}、それも企業倫理の範囲にとどまる日本とは異なり、持続可能な地域社会につながるヨーロッパ的なCSRの考え方であった。

（現在はAccountability Now）を訪ねたのも法令遵守にとどまらないCSR、企業の根幹として

の経営理念や倫理について考えたかったからです。そこで出会ったアレックス・マクギリブレイには、ヨーロッパ・イギリスにおけるCSRの歴史を踏まえ、持続可能な地域社会につながるCSRのあり方について書いてほしい、と『CEL』誌への寄稿も、お願いしました」（2011年3月・96号 特集「持続可能な未来にながCSR——その本質と新しい潮流」より）

ほかにもアメリカのコーネル大学天然資源学部での意見交換では、実証フィールドをもつ地域資源の活用・連携が大切であることを再確認した。西宮市を拠点に活動するNPO法人こども環境活動支援協会「LEAF」（19頁参照）との共同研究も、このような視点から始まったという。もはや行政だけでは、複雑化・多様化する社会問題に対処するには限界がある——NGOやNPO、社会的企業と直接につながる形でCSRを捉え、CELの活動をその文脈上に位置づけようとしていたのである。

多木にとつての節目の仕事は、CEL設立25周年記念シンポジウムだった。2011年5月の開催目前に起きた東日本大震災の影響で、惜しくも自らの退任後となる同年11月に延期とはなったが、数年をかけて準備をしたその内容はまさに「集大成」と呼ぶべきもの。その舞台で、研究・実践の成果は「所員全員参加で」発信することにしよう、と当時の多木は呼びかけている。テーマは「人」とつながりから持続可能な社会を実現する」であった。



今号の特集のため、自身が所長を務めた当時のCELについてインタビュー取材にこたえる第7代所長の木全吉彦。撮影／宮村政徳

東日本大震災がきっかけとなった CEL独自の「エネルギー講座」

2011年3月11日に東日本大震災、それに伴う広範囲の津波による甚大な被害が発生した。この出来事は、日本の社会全体に巨大なインパクトを与えたが、とりわけ東京電力福島第一原子力発電所の事故発生を機に、単なる「自由化」の議論を超えた「電力システム改革」の必要性が問われることになった。エネルギー供給のリスクを抑えるためにも、大規模集中型から分散型の供給システムへ移行することが望ましいのではないかといった議論がなされ、同時に再生可能エネルギーへの期待も強まったのである。

「ちょうど東日本大震災の当日に発令を受けました。着任のタイミングで、私自身も大きく揺さぶられたわけです」と語るのには、この時に第7代所長に就任した木全吉彦である。

『「エネルギー」を冠した研究所の所長として、すぐにでも震災の現場を見にいききたい、と5月

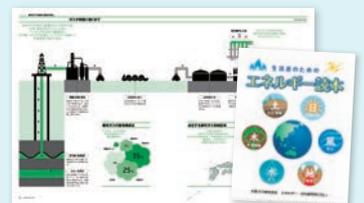


上／多木が準備を進め、木全のもとで開催された設立25周年記念シンポジウムにて。当時の研究員たち。下／熱心な聴衆で満員となったシンポジウム会場。

には現地を視察させてもらいました。とはいえ長期的視点から研究を行うCELと、都市ガスの復旧支援にあたっていた社内の他部署では、どうしてもギャップがある。そうしたなか、自分たちは『エネルギー・文化研究所』なのだ、と強調することから仕事を始めた記憶があります」

所長としての木全は、エネルギー政策に大転換をもたらすかもしれないこの時期、CELはどんな役割を果たすのか――そんな課題を、経営陣から与えられたと感じていた。そこで、まずは一般生活者のエネルギーに関する意識調査を実施し、その結果に基づいてエネルギーについてのリテラシーを高めるような連載「エネルギー講座『暮らしとエネルギー』」を『CEL』誌上で始めている。

全体監修は環境・エネルギー工学の第一人者として知られる大阪大学の下田吉之（40頁参照）教授に依頼。当麻潔研究員を中心に、CEL研究員がエネルギーについて生活者の視点でわかりやすく解説するとともに、各分野の識者にコラムを書いてもらい、読者に新たな視点や気



『CEL』誌の連載10講をまとめた『生活者のためのエネルギー読本』は、一般に広く好評を博した。

付きを与えた。10講におよぶ連載は、2014年春に『生活者のためのエネルギー読本』という一般向けの小冊子にまとめられて配布、広く好評を博している。

『CEL』誌リニユーアルと 「大衆化」路線で高めた発信力

木全はまた、前任の多木が掲げた「コミュニケーション戦略」を、さらに思い切った形で進めている。なかでも『CEL』誌は、2度にわたるリニユーアルを経てビジュアル的にも大きく変貌することになった。

『CEL』誌は厚みのある立派なつくりで重厚な論文も多く、それまで社内でも『敬して遠ざける』風潮があったことは否めません。社員間で積極的に閲覧されることもなく、上司の机の上で読まれないまま埋もれているイメージ。たとえ多少内容が薄くなったとしても、ともかく手にとってもらえる冊子にしたかった」

既存の制作チームのままで行った1回目のリ

ニューアル（2012年・101号〜2013年・103号）に続き、1年後の104号から、企業PR誌などで定評ある外部のデザイン会社を起用し、平凡社に誌面の編集を依頼する体制に変更した。

「『CEL』誌のコンテンツ自体、デザイナー心をおおいに刺激するものだったようです。こちらも所員の思いをぶつけ、すごくいい関係がもてたと思う」

こう語る木全とともに、リニューアルにあたったのは前出の豊田。わかりやすく美しい誌面をつくり、有名なオピニオンリーダーの寄稿やインタビューを増やすなど、世間の関心も取り込み、プロフェッショナルの力も借りながら総合的にCELの発信力を高めていった。

一連の『CEL』誌の「大衆化」路線を進めた木全は、それまで社内の企画部門で組織改革に携わったり、研究開発部門の企画担当として社内向け内見会を企画したり、常にわかりやすく伝えることを心掛けてきたという。それだけに、「伝える努力を惜しまない」ことをCELのメンバーにも説き続け、豊田をはじめとする所員もそれに応えるなかで、CELは内外への発信力を高めていった。

総合力とアイデンティティ確立へ 今日の礎となる多様な挑戦の時代

2012年4月、地域ステークホルダーとグ

ループ会社全体の連携を強化するため、大阪ガスに「地域共創部門」が設置されると、近畿圏における地域活性化や価値創造活動を推進する「近畿圏部」、自治体やコミュニティとも密接に関わり地域における大阪ガスの顔としての役割を担う「地区支配人」とともにCELもその傘下に入った。木全は、このことの意味を積極的に捉えている。

「CELがスポーツや文化芸術、まちづくりに関する情報発信を行う拠点ともなった。たとえば、それまで『なにわの語りべ』と銘打っていた栗本智代研究員の活動も、この機会に他地域へも活動を広げ、新たな担い手を育成・応援する活動への進化をはかりました」

2013年5月には、うめきたの開業間もないグランフロント大阪「ナレッジキャピタル」内に「都市魅力研究室」を開設。CELの分室として、栗本の「語りベシアター」、当麻が担当し2050年に向けた地域コミュニティにおけるエネルギー・デザインの検討を行う「エネルギーサロン」など、さまざまな活動の拠点にもなっている。

2015年4月、小西池透が第8代所長に



第8代所長を務めた小西池透
(2016年撮影)。

就任する。財界対応スタッフを経て大阪ガス東京支社長、広報部長を歴任した小西池は、自らのネットワーク

クを生かし、「CEL会」と称してマスコミ関係者を集めるなど、CELの「コミュニケーション戦略」をさらに推し進めた。

小西池はまた、パーティーションの改修などオフィスレイアウトの変更により、所員同士のコミュニケーションを円滑化。在任期間は1年と短かったが、木全の「大衆化」路線を引き継いで『CEL』誌を試験的に一般書店に置いてもらい、その反応を見るといった積極的な取り組みも行っている。

安達から小西池に至る5人の所長たちは、研究所を取り巻く大きな変化のなか、それぞれが豊かな個性を発揮しつつ、マネジメントを通して研究員を支えた。企業内研究所という希有な存在を組織のなかで意義づけ、発展させようとした彼らの挑戦が、以後、今日に至るCELのアイデンティティを、しなやかに強固なものへとつくり上げていったのである。

注

*1 「CEL生活意識調査」の概要は、『CEL』誌132号の連載「『CEL』を振り返る」を参照。

*2 1959年生まれ。東北芸術工科大学教授、京都芸術大学教授を経て、2025年に開学したZEN大学知能情報社会学部教授。著書に『地球の目線 環境文明の日本ビジョン』（PHP研究所）などがある。

*3 ガス科学館は大阪府高石市の大阪ガス東北製造所第二工場内にある、地球環境とガスを中心としたエネルギーの「いま」と「みらい」を楽しく学べる体験型見学施設。姫路ガスエネルギー館は、姫路市にある大阪ガスの体験型見学施設。

*4 「企業の社会的責任 (Corporate Social Responsibility)」の略で、当時の日本ではあくまで企業に限定した倫理や信頼回復が中心だったのに対し、ヨーロッパ(EU)ではより高度な政策課題としてこれを捉え、政府・企業・市民社会が連携し、持続可能性と競争力を両立する仕組みの構築を掲げていた。

CELの歩み③ 再起動期「2016～2019」

設立30年の節目に問うた研究所の存在意義

—— 現在を読み解き、文化を編み直し、未来を構想する



大谷みさ子〓執筆
宮村政徳〓撮影

撮影場所／大阪くらしの今昔館

池永寛明 Kenaga Hiroaki

〔第9代所長／社会文化研究者〕

エネルギー・文化研究所（CEL）が30周年をむかえた2016年、所長に就任した池永寛明氏。「ルネッセ（再起動）」をテーマに掲げ、研究所の新たな役割やあり方を探りながらCEL自体の再起動に取り組む一方、「CEL」誌では2年間・計6号にわたる連続特集企画「ルネッセ」をスタートさせた。池永氏が率いた変革の3年間を振り返る。

1986年4月1日に設立されたエネルギー・文化研究所（CEL）は、草創期には倉光弘己氏、山藤泰氏、古館晋氏らが基盤を築き、中興期には5名の所長が存続の意義を示されています。そしてちょうど設立30周年をむかえる2016年4月、私が所長に就任しました。

長い研究所の歴史を振り返ると、私の就任はやや異例の出来事でした。社内で研究分野を歩んできたわけでもなければ、アカデミックな世界に身を置いてきたわけでもない。むしろ、営業の現場を出発点に、国のエネルギー政策、自治体の都市計画やエネルギー・環境政策など、実務の最前線を歩いてきた「現場型」の間で、歴代の知性派の所長たちとは毛色が異なっていました。正直なところ戸惑いがありましたが、

当時の社長からは「お前の好きなようにやれ」と言われたことを覚えています。

国家・企業・都市、その三層を またぐ経験が教えてくれたこと

私がCELの再起動を目指した背景のひとつに、2011年の東日本大震災があります。震災前、私は日本ガス協会^{＊1}で企画部長として国のエネルギー政策を担当していました。2000年前後には地球温暖化やCO₂削減が強く意識されはじめ、温室効果ガス排出の少ない再生可能エネルギーや原子力を活用した「電気時代」が来ると語られていました。「ガス業界は終わった」と言われるほどの危機感があるなかで、私は都市ガス事業の将来像を提示する中期計画をつくる立場にありました。まさにその発表を控えた日の午後、震災が起り、福島原発事故によって世界のエネルギー政策が転換を迫られたのです。私は被災地に入り、病院や工場、学校、避難所などを回りました。そこで、エネルギーが止まるという現実が、人の命や生活の根幹を奪うという事実を突きつけられました。「エネルギーは単なる産業ではなく、人の生死に直結する、人間の営みそのものだ」ということを痛感したのです。

その後、北東部エネルギー営業部長^{＊2}として災害復旧対応の最前線に立ってレジリエンスを含む企業経営を学び、近畿圏部長^{＊3}と

して自治体政策やまちづくりにも向き合いました。国家レベルでの政策形成、企業レベルでの事業遂行、都市（地域）レベルでの自治体計画への参入。これらの経験を通して、私は結果的に、国家・企業・都市という三層の経営を行き来することになりました。この視座こそがCELの方向性に結びつけるべきものだと感じたのです。研究は社会の現場と接続してこそ価値を持つ。机上の議論だけでは社会は動かせない。現場で生まれた実践知と理論知を結びつけなければならぬ。CELに来た私は、研究所をいわゆる「象牙の塔」にしてはならない、社会の中に配置する必要があると強く感じました。そして、エネルギーを文化や社会と結びつけ、企業の知（ナレッジ）を社会に還元させることが使命だと考えるようになったのです。

所長就任時に見えた課題——豊かな蓄積、しかし社会課題との接続が弱い

CELに着任してまず感じたのは、「ここには宝の山がある」ということでした。大阪ガスが実践・提案する「NEXT21」での居住実験や生活者調査、文化研究、地域研究など、どれも企業所属の研究所としては比類のない知の蓄積がありました。私自身、企業や行政での経験から、こうした実践的な知が、いかに貴重かを理解していました。また、『CEL』誌の存

在も大きかったです。社外のオピニオンリーダーと言われるような人たち、たとえば作家の堺屋太一氏^{＊4}が手元に残していた数少ない雑誌の一つに『CEL』誌の第2号と3号があったことは、研究所としての社会的影響力を示す象徴的な例です。私の所長時代にスパー・アドバイザーとしても参画いただいた知の巨人と言われる松岡正剛氏^{＊5}など数多くの識者たちからも、『CEL』誌は高い評価を得ていました。

しかし同時に、「研究所の価値が社会にも社内にも十分に伝わっていない」という強い危機感も抱きました。実際に研究員の専門性は非常に高く、学識者からの評価も厚い。なぜ社内外に十分伝わっていないのか？ それは研究員の研究と活動が個々に行われ、その研究内容と社会課題の構造との接続が弱いからではないのか。これは研究者個々の問題ではなく、組織としての方向性が曖昧なことが原因ではないのかと考えました。結果、研究の意義を説明することが難しくなり、研究所全体としての存在理由が見えにくくなっていったのではないかと。

私はまず、研究所としての「物語」を取り戻すことが必要だと考えました。どこを目指し、なぜ存在するのか。その根幹を言語化する作業を避けては通れない。過去の延長線で研究を続けるのではなく、未来との接続点をつくり直さなければ、研究所の存在意義は失われる。その確信が、私に覚悟を与えました。

再起動を目指して——改革の象徴と なった「ルネッセ」の思想的枠組み

改革の起点となったのが、10年以上先となる2030年の社会風景を見据えた中期計画の策定です。私は、研究所は未来を見通す力を持たなければならないと考えていました。未来を構想する力がなければ、研究は過去の知識の蓄積に後退してしまふ。しかし同時に、未来だけを語っても現実を動かす力にはならない。現在という現場の複雑さを丁寧を読み解くことが必要であり、そのためには文化の視座が欠かせません。文化 (culture) という芸術や教養を指すように思われますが、語源を同じくするカルチベート (cultivate) という言葉が示すように、耕す・掘り起こすことが大切です。そこで私は、研究の三本柱として「未来を観る力 (構想・予見)」「現在を観る力 (現場・実践知)」「文化を編む力 (統合・編集)」を掲げました。

未来の兆しを見つける力、現場の声に耳を傾ける力、専門性の異なる知を編集して社会に還元させる力——これらが企業シンクタンクの存在意義です。「NEXT21」が象徴的であるのは、そこに「現場の息遣い」があるからです。そこで暮らす人々の声や体験を研究に結びつけることがCELの強みです。しかし当時、それは十分に活かされていないようでした。研究者の自由研究ではなく、社会の課題から出発する

研究へと転換させる必要がありました。私は繰り返し伝えました。「まず社会があり、その課題からテーマが生まれる。研究のための研究では意味がない」と——ただし、これは、研究員の興味を否定するものではありません。むしろ、その専門性を社会の課題にどう生かすかという、より高い視点への転換でした。

その象徴として私が立ち上げたのが「ルネッセ (Renesse)」です。ルネッセとは、ラテン語の「再び (ren)」と「実在する (esse)」を組み合わせた造語で、暮らし・文化・都市の「再編集」を意味します。未来・現在・過去を横断しながら、研究成果を社会と企業につなぎ直すための思想的枠組みです。研究成果は積み上げるだけでは意味を持たない。社会に届けられ、理解され、使われて初めて価値が生まれる。研究を「再編集」し、社会に開く。この思想がCEL再起動の要となりました。

同時に、発信力の強化にも取り組みました。社内での評価は社外の評価によって変わります。私はより多くの人にCELの存在を知ってもらふ必要性を感じ、2017年から、『日経COMEMO *6』での連載を通じて社会への発信を続けました。日本経済新聞社大阪本社から「内容は何でもいい。池永が大阪から発信することに意味がある」と言われ、逆に大阪からの知の発信が失われつつあるという現実を突きつけられました。大阪では、かつて商人文化の中から未来を開く知が生まれていました。それをもう一度取



2018年9月8日NEXT21ホールにて、江戸後期の大阪商人で絵師・戯作者でもあった暁鐘成が、知の交換と共有の場として催した「汁講」を再現。大阪の再起動を議論した。

り戻す必要がありました。

また「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長 (当時) との出会いが、文化とは過去の展示ではなく、未来を生み出す装置であるという強烈な気づきを与えてくれました*7。文化とは物の見方、感じ方、考え方、行動の方法であり、社会を動かすOS (オペレーティングシステム) だと理解したのです。

もう一つ、印象深い取り組みとして、松岡正剛氏との「ルネッセ」での対談があります (『CEL』誌2017年7月・116号〜2018年3月・118号に掲載)。これは私にとってもCELにとっても非常に大きな意味を持ちました。第1回の打ち合わせは大阪の法善寺横丁で行われましたが、事前にいただいた宿題は「大阪関西から見た日本史のキーワードを古代から現代まで1000単語挙げること」。無茶な依頼にも思いましたが、CELの研究員全員で議



スーパー・アドバイザーとして協力を仰いだ松岡正剛氏と。『CEL』誌において3号にわたる対談を実施。

論し、実際に1000のキーワードを提出しました。それを見た松岡氏に「本当に出したのか」と驚かれたことを覚えています。そのプロセスの中で、私は改めて「文化とはシステムである」と強く感じました。伝統芸能や形を守ることだけが文化ではなく、文化とは未来へ向けた方法論だということ。そして文化は、企業文化も含め、人間の生きる技術である。その考えを深めたのが、松岡氏との対話でした。対話の終盤になるにつれて、松岡氏が聞き手に回る場面が増えたのも印象的で、それはCELそのものへの評価だと受け止めています。

再起動期を終えて——研究所とは何のために存在するのか

私は研究を単なる「知識の保管」だとは思っていません。過去を保存する行為ではなく、未来を生み出す行為です。だからこそ、CEL

の使命は過去ではなく未来にある。未来を夢のように語るDreamerではなく、徹底して現代を見据え、そこに埋め込まれた未来の種を掘り起こす存在であってほしい。現在の中には過去の本質が埋め込まれ、未来の種が潜んでいます。それを「見える化」し、「見せる化」し、「かたち化」する。その三つの工程を私は研究の基本方程式だと考えています。特に今後の生成AIの時代にはこの工程が大事になるはず。生成AIは、いわば平均解の領域を高速で模倣し、大量に生み出す存在です。レポートも企画書も、就職活動のエントリーシートさえも、同じようなものが大量に生成されます。では生成AIが模倣できない知とは何か。それは実践知と理論知が融合した知であり、人間の経験から生まれる思考の飛躍です。だからこそ、CELの役員には、経験を経験のまま置かず、思考に変換し、理論化してほしい。それが未来を切り開く唯一の方法ではないでしょうか。

振り返れば、CELの再起動に取り組んだ数年間は、研究所の存在意義を問い直す時間であり、同時に私自身が「研究所とは何か」を深く考える時間でもありました。

この経験を通じて、私は確信を持ちました。研究所は、人の暮らしの変化を丁寧に観察し、文化を編み直し、未来を構想する場である。そしてそれは、単なる情報の蓄積ではなく、人間の営みそのものを理解し、未来への道筋を描くための知的営みである、と。研究所が掲げ続け

た「エネルギー・文化」はまさにその精神の表れです。このCELの精神が、歴代の所長たちにも受け継がれ、それぞれの形となり蓄積されているはず。これらの知を活かしつつ、現在の富尾博之所長とCELの役員たちが持つ情熱と専門性で、これからの社会に新しい視点を提供し続けてくれることを願ってやみません。

注

- *1 全国193の都市ガス事業者が加盟する業界団体（2025年4月時点）。
- *2 大阪ガスエネルギー事業部、大阪北東部・奈良エリアの業務・産業用ガスを担当する営業部長。
- *3 近畿圏における地域活性化や価値創造活動の推進を担当。
- *4 「1935〜2019」作家・経済評論家。大阪府生まれ。通商産業省（現経済産業省）の官僚として1970年の大阪万博開催に尽力。小説『油断』『団塊の世代』などを発表し、退官後も多方面で活躍した。
- *5 「1944〜2024」編集者・著述家。京都市生まれ。「編集工学」を提唱し、情報、宗教、美術など多様な分野で日本文化を論じた。『知の編集工学』『日本という方法』松岡正剛千夜千冊など著書多数。
- *6 日本経済新聞社が運営するオピニオン共有サービス。様々な分野の「キオビニオンリーダー」たちが、社会に思うこと、専門領域の知見などを投稿する。現在は「pod」上にプラットフォームを移す。
- *7 文化講座「上方生活文化堂」（産経新聞社主催、CEL・大阪くらしの今昔館企画）の開講は、谷氏とともに実施したルネットの実践例のひとつ。



池永寛明

（いけなが・ひろあき）

1959年、大阪府生まれ。1982年4月、大阪ガス(株)に入社。人事・勤労、エネルギー企画、日本ガス協会企画部長、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長、エネルギー・文化研究所所長などを歴任。現在は、(株)池永ラボ代表取締役、長などを歴任。現在は、(株)池永ラボ代表取締役、A1と社会をつなぐ一般社団法人データリテイコンソーシアム事務局長・WeTeBeing 部会長、堺屋太一研究室主任研究員、関西国際大学客員教授、未来展望研究所所長など。社会文化研究者・日本経済新聞COMEMO キーオピニオンリーダーとして、都市・社会・産業の現状と課題を過去と現在と未来をつないで読み解き、コロナ禍後社会のあり方・未来展望などを社会に発信中。

CELの歩み④ 再興期「2019」

激動の時代に描く、再興の道筋

— 研究するCELから行動するCELへ —



Tanaka Masato
田中雅人 × 金澤成子 × 富尾博之
[第10代所長]

Kanazawa Shieko
Tomio Hiroyuki
[第11代所長]

Facilitator
Yamanoh Hiroshi
[所長代理]

前列左から、富尾所長、金澤氏、田中氏。後列、山納所長代理。

加藤しのぶ 構成
宮村政徳 撮影

2019年末からはじまった新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、社会に大きな変化をもたらした。その最中の2020年3月、エネルギー・文化研究所(CEL)は単独組織ではなくなり、近畿圏部「*1」に統合された。その後、Daigasグループ機構再編により、2022年4月からは大阪ガスネットワーク株式会社事業基盤部内で地域共創活動を推進する組織の一つとなっている。コロナ禍で社会生活が激変し、組織も大きく転換する中でどのように舵を取ったのか。所長を務めた田中雅人、金澤成子、そして現所長・富尾博之の3名に話を聞いた。

山納 今号ではエネルギー・文化研究所(CEL)の40年を4つに区切りその歩みを振り返っています。ここではCELの「現在」について2019年以降に所長を務められた田中雅人さん、金澤成子さん、そして現所長の富尾博之さんにお話をお聞きしたいと思います。

その前に自己紹介をしますと、私は2023年4月にCELに異動し、現在、所長代理を務めています。CELとは近畿圏部時代も含めて十数年の関わりになりますが、今回あらた

めて『CEL』誌の既刊137号分を読み返しながら、歴代の所長が何を考え、舵取りをしてきたかを私なりに捉え直してみました。

その中で今回4つに区切った期を大きく振り返ると、CELが設立された1986年4月から2000年3月の「草創期」は、『CEL』誌の創刊時に「絶えず社会に対して一歩先からの視点を提供できることを目指す」とあるように、初代所長の倉光弘己さんをはじめとする広い見識と強い発信力を誇った所長が牽引した時代だったと感じています。続く2000年4月から2016年3月の「中興期」は、CELが企業内研究所として大阪ガスという会社に対してどれだけ貢献ができるかといった「内側へ向けた視点」も問われるようになり、CELの方向性をどう定めていくかを模索した時代であるように思っています。さらに2016年4月から2019年3月までの「再起動期」は、池永寛明さんが研究を「再編集」し社会と企業につきなぎ直す「ルネッセ」を掲げてCELの再起動に力を注いだ時代です。そして続く2019年4月以降から現在までを「再興期」と位置付けているわけですが、「再興」というキーワードを挙げた理由の一つは、コロナ禍という時代の大きな転換期を経て現在に至っているということがあります。

ここでは田中さん、金澤さんにとってCELの「再興期」がどのようなもので、何を目指していたのかを振り返り、さらに富尾さんと現在の

CEL研究員は今後、将来を見ずして何を発信していくのかを考えていければと思います。

「再興期」のCEL ——コロナ、組織再編のなかで

山納 まずは2019年から所長を務められた田中さんに着任前のCELの印象、所長着任時の思い、在任中の方向性と取り組みなどについてお聞きしたいと思います。

田中 私にとってCELとの出会いは、新入社員だった(92年) 当時に読んだ『ジオカタストロフィ』という本から始まります。CELでの研究内容をNHK出版が再構成して発行したものです。現在の状況が続くと人類は100年以内に滅亡する可能性があるという内容に衝撃を受け、今でも自分が行動する時の指針ともなっています。この経験から、CELは世の中でもあまり目を向けられていなかった問題にいち早く取り組んでいる大阪ガスの看板的存在であり、社外の評判がとて高い発信力のある研究所という印象をもっていました。その所長というと先ほど山納さんも話された倉光さんのような、社内でも文化人といわれるような方が担うものだと思っていましたから、文化的素養のあまりない私が所長と聞いた時、いったい自分は何を求められているのかと悩みましたね。当時私は近畿圏部長と兼任という形で着任しましたので、これはおそらく私自身がコン

ピタンスをもって研究をするということではなく、むしろ組織マネジメントをせよということだと考えました。まずは、研究員の方々がより研究を深め、それを内外に発信していくことに対してしっかりと後方支援しようと考えました。

山納 そのためにどのような方針を立てられましたか。

田中 実は2019年以降、CELは会社の機構再編に翻弄されたところがありました。それまでの独立した組織から近畿圏部の一組織となり、後に大阪ガスネットワークに分社するのですが、そのなかで組織としての形を変えざるを得なくなったところがあります。そこにコロナ禍でした。とはいえ、そのような環境の変化の中で萎縮してしまわないよう、むしろそれを好機ととらえて次に社会がどう変わるか、何をすべきか考えようと話し合いました。

山納 コロナの先を見据えて社内で行った「ア



2019年9月、シンガポールにて「語りベシアター」初の海外公演。栗本智代研究員は、日本や関西の文化に関心を持つシンガポール人に、英語と大阪弁で「語りベシアター」形式を交えながら文楽の魅力や作品を紹介。



フターコロナ創造プロジェクト」もその時期でしたね。

田中 研究員の方々が考えたテーマ、やりたい取り組みには絶対に「ノー」はいわないという方針を進めました。むしろ、やりたいと思うことは何でもやりなさいと後押しするのが自分の役目だと思っていました。

山納 特に印象に残った取り組みはありますか。

田中 栗本智代研究員の「語りベシアター」が2019年9月にシンガポールで初の海外公演を行ったことですね。JCC（在シンガポール日本国大使館ジャパン・クリエイティブ・センター）の設立10周年で招かれ、現地で初めて上演される文楽をわかりやすく解説し、その代表作の一つ「曾根崎心中」を紹介したものです。海外での公演そのものに反対もありましたが、公演は満席で質疑応答も活発でした。「語りベシアター」が海外でも評価を得られた成果は大きいと思います。

山納 金澤さんはCELの所長に着任された

時、どのように考えられましたか。

金澤 私はCEL設立の3年後に入社していますので、もちろん存在は知っていましたが、深い関わりはなかったんですね。ただ企業内研究所でありながら、エネルギーに寄ることなく公平な立場で、社外と交流している研究所という印象がありましたし、その公平性が故に長く存続しているのだろうと思っていました。

私が着任したのは2020年、コロナ禍の真ただただ中で在宅での業務を余儀なくされた時期でしたから、長い歴史をもつCELの在り方も方向転換が求められるタイミングだったかと思えます。その責任の重さを感じつつ、田中さんと同じように、研究員の皆さんの取り組みを理解し、どこまでサポートできるかを考えました。また私はそれまで「行動観察」「*」といった取り組みや新規事業などにも多々関わっていましたが、チャレンジングな面も期待されているとも感じていました。

CELの一番の強みであるフィールドワークにも制限がかかる中で、現場の生きた声を聞くのは難しい時期でしたが、世の中に対してコロナ禍が与えた影響をきちんと捉えるいい機会でもあると考え、テーマとして取り上げていきました。その取り組みの一つにワーキングマザー22人を取材し、コロナの中で女性の考え方がどう揺れ動いているかといった調査があります。コロナを通して価値観が変わるもの、変わらないものを浮き彫りにすることができたので



はないかと思えます。

また「中興期」以降、社外からの評価は高くとも、社内では存在が埋もれていく傾向にあったCELの存在意義を社内に向けて発信することにも力を入れようと考えました。Daigasグループの目指す方向として掲げられた「地域の価値創造」をCELのビジョンとして再定義し、社内にも我々のやっていることがDaigasグループの目指すものと合致していることをアピールしました。

山納 他に印象に残った取り組みはありますか。

金澤 「活力ある高齢社会づくり」を研究していた遠座俊明研究員（当時）の「健康・生きがい就労トライアル」は、元気な高齢者が人材不足に悩む福祉事業所や保育所等で短時間・短期間の就労に取り組みですが、研究が社会実装に結び付いた好例だと思います。

山納 現所長である富尾さんにも同じことを伺いたいと思います。

富尾 私は長く家庭用エネルギー部門の直営業をやってきました。CELは縁遠い存在でした。ところが2022年4月から大阪ガスネットワークで地域共創活動を管轄するようになってからCELのこれまでの取り組みを知る機会が増え、皆さんがおっしゃるように社外評価がとても高いことに改めて気づいたんですね。ただ、社内評価はそれほどではない。そこで2024年4月に所長に着任するにあたり、CELの社内評価をもっと高めたいと考えました。CELが何をしているのかをきちんと知ってもらえる環境を整備するのが与えられたミッションの一つだと思っています。

私の着任はコロナ後で、リアルでの活動が再開できるようになっていましたから、CELの強みでもあるフィールドワーク的な研究をもっと推進したいと考えました。さらに、外部の団体とのコラボレーションを進めることで、認知度や活動の価値を高めていくという方向も意識しました。先ほども話題に上がった「語り



ベシアター」では、2023年、2024年の生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪「*3」でガスピルの設計もした建築家・安井武雄を題材にした公演を行い、盛会でしたね。このような自治体や地域の事業と連携した活動はこれからもますます広がっていきたいと思います。

山納 他に今進めている取り組みはありますか。

富尾 CELは2015年に、都市居住魅力の発信、活力ある地域社会の創造に貢献することを目的に、長年協力関係にあった大阪くらしの今昔館と包括連携協定を締結し、様々な取り組みを行ってきました。そして、昨年から新たに小西久美子研究員が「お出かけ今昔館」を開催しています。大阪くらしの今昔館から館蔵資料（レプリカ）を、大阪ガス実験集合住宅NEXT21に「お出かけ」させて、専門家の解説で鑑賞した後、実際にまちを探求し参加者同士で交流するというもので、新たな「住まち・大阪」の魅力創出につながることを期待しています。

CELの強みと課題

山納 先ほどからCELの「強み」という言葉が聞かれますが、皆さんはCELの強みをどう考えますか。また逆に課題と思われることはありませんか。

田中 かつてCELは大阪・梅田駅近くの阪急グラนด์ビルにありました。新大阪にもアクセ

スがいいという地の利のよきもあって社外の学識者、財界人など様々な方々が移動の合間にふらりとやって来られていて、時にはそこで即席座談会が開かれるなど、まるでアカデミアの磁場のような場所でした。そうした環境の中で研究員も交流を広め専門分野の研究をより深めていったと思うんです。企業内研究所でありながらこうした豊かな交流ができていたのがCELの強みだと思います。CELを出て大学の教授になった人は何人もおられますが、それはCELにあった豊かな交流環境が育んだものだと思います。そして、こうした「CELファミリー」が研究所を支えてくれているのが、CELの強みと言えると思います。

ただ、組織再編を経た今、研究分野に偏りを感じています。「エネルギーと都市と文化」を核に、経済や教育、食など多岐にわたる研究がなされていたのですが、人数の減少もあって今は研究領域が狭まっている。何より、数年前からエネルギー分野を研究する人が前田章雄研究





大阪・関西万博のガスバピリオン「おぼけワンダーランド」(日本ガス協会)で行った、高齢者の就労と健康に関する共同研究の様子。取り組みはメディアでも紹介された。



員しかいないのも寂しいと思っています。

金澤 CELはこれまで、文化、生活、暮らしや環境に対して、先を見据えて社会課題に取り組み、その解決の方策を検討し続けてきました。CELには設立時から社外パートナーとの幅広い交流がありますが、課題解決の方策を産官学連携で進められるというのは大きな強みですね。これは企業内研究所でありながら公平な立場で行政、教育関係機関、地域などと関わってきた経緯があるからこそで、今後もそういった実証的研究を進めていけるといいのではないかと思っています。

山納 先ほど話題に上がった遠座さんの実践的研究も、行政や福祉施設などの現場がいち早く動いてくれたからこそ取り組めた事例だと思いますが、これも研究員が社外パートナーとのネットワークを丁寧に築いてきたからですよね。

金澤 そう思います。大学などの教育機関では研究を社会実装する現場を持っていませんが、企業はそれができるのが強みです。ただ社会課題の場合、地域の価値創出につなげるためには行政との連携が必要で、その連携の仕組みをCELがうまくつくるのが求められてきますね。また田中さんも言われるように、CELとして新しい人材を増やすのが難しい状況にあります。コロナ禍以降、オンライン形式も定着しているのですが、今いる研究員がオンライン、オフライン様々な形で社内外とつながり、交流することで広がるものがあると思います。

富尾 CELの強みはやはり外部からの信頼度が高いことですね。今の立場になってから、社外でCELに対する熱い思いを持っている方、「CEL」誌を楽しみに待っている方がたくさんおられることを肌身で感じています。

金澤さんがおっしゃる強みである社外パートナーとの連携でいえば、2025年に大阪・関西万博の「ガスバピリオン」で、大阪大学などと4者で共同研究をしました。高齢者の就労が血圧変動に及ぼす影響を調べるため、70歳以上の高齢者18人に有償ボランティアとして参加してもらい、ガスバピリオン内で軽作業をしてもらいながらその間の血圧、脈拍、動作データを集めたのですが、このバピリオンの館長に金澤さんが着任されたこともあって、連携もスムーズにとれ、共同研究が実現できたと思います。

田中 「CELファミリー」の力ですね。

富尾 一方で、現在研究員が5名という状況の中で、いかに研究に厚みをもたせていくかが課題ですね。40年の振り返りでも繰り返し語られています。研究の個人商店化はCEL発足当初から続く組織マネジメントの課題です。ただ、これは個人のテーマを追求することとのトレードオフとも言えることで、それぞれの研究分野・関心の中にある共通点や相違点、バックグラウンドや人脈など、CELにおけるソーシャルキャピタルとも言えるものを相互に活かし合っていければ、それは大きな強みになると思います。

CELのこれから

山納 お話をお聞きしていると「研究するCELから行動するCELへ」とさらに進化することが大事なのではないかと感じます。最後に、40周年を迎えるCELに期待することをお聞かせください。

田中 最初にお話しした『ジオカタストロフィ』は、1991年から99年後に人類が滅亡する可能性を論じていますが、99年を3つのフェーズに分けているんですね。私の所長着任時は、その第一フェーズの最終年(2024年)が数年後に迫っているというタイミングでした。そこであの本が出た当時考えられていたことにどれだけ先見性があったかという検証をしたいと思っています。力不足でそこまでは至り

ませんでした。金澤所長の時代に『CEL』誌の『CEL』を振り返る」という企画で前田研究員が「ジオカストロフィとは何か」という論考を掲載（『CEL』誌2022年9月・131号）していましたが、今後CELで、ぜひ今の社会環境に照らし合わせて検証し、現代の「ジオカストロフィ」を世に問うていただけたらと思います。

さらに言えば、これは少し極論になりますが、CELが今後存続していくためにも企業内研究所という立場から進化するというのも視野に入れていいのではないかと思います。大阪ガスの中のCELではなく、社会の中でのCELとなる道を模索することもこれから必要なのではないか。それは、CELがそれだけの価値や財産を有した、唯一無二の存在だと思っからです。金澤 Daigas グループは、社会、地域に対して未来価値の創造に貢献し、持続可能な社会の実現をめざしているわけですが、実際の取り組みはそんなに先駆的なものばかりとは言えません。だからこそ産官学連携で取り組む実践的研究のフィールドをもつCELがもっとその立ち位置を示していくべきだと思います。Daigas グループではなく、企業としてどうあるべきかの方向性を示すのです。そのためには、課題に対して常に真摯に問い続け、世の中が変わっていく中でもここは変えてはいけない、こうあるべきだという提言も必要です。もちろん難しいことですが、まず持続可能な研究

所であり続けるためにどうあるべきかを問い直すことから始めなければなりませんから。

その営みを続けていくことで、Daigas グループ内に寄らず、CELの存在意義は残ると思うんです。実証フィールドがあるCELの強みを生かしてこれからも問い続け、提言し続けてほしいと期待しています。

富尾 私の場合、これからどうあるべきかという話になります。今回の特集の取材で諸先輩方の話をお聞きする機会を得て、皆さんがいかにCELに熱い思いを注いでこられたかを実感しています。今、金澤さんは問い続け、提言することが必要と話されました。20年、30年先の社会の姿を生活者視点で考え、あるべき姿を示す、これがCELの原点にある姿勢だと思います。

歴代の所長の話を通してCELの40年の歴史を学ぶことはただの懐古ではなく、「変化」を研究するようなものだと感じています。何か新しい局面があるたびにしてきたことを学ぶことで、これから何か別の新しい局面があった時にどうするか、打つ手を考えることもできる。CELにはそうした「先を読む力・考える力」が求められている。2030年、2050年に向けてひっ迫した課題は山積していますが、それに目を背けることなく研究を続けていきます。

山納 そのためには解像度を上げて未来像を考えることが必要と、第9代所長の池永さんが話しておられました。さらにCELはそれができるところだというエールもいただきました。も

ちろん簡単なことではありませんが、研究員一丸となつてしっかり話し合い、先を読む力をつける。その先にCELがこれから生きる道があり、それをめざして進んでいければと思います。今日は貴重なお話をありがとうございました。

注

- *1 近畿圏における地域活性化や価値創造活動を推進する部署。
- *2 消費者やユーザーが製品やサービスをどのように利用しているかを観察して様々な事実・行動データを収集し、その背後にある動機や理由、潜在ニーズや課題などを解き明かす手法。マーケティング、新規事業、UX（ユーザーエクスペリエンス）改善、ソリューション開発などに用いられる。
- *3 毎年の週末に、大阪の魅力ある建物を一斉に無料で公開する日本最大級の建築イベント。通称「イクフェス」。

田中雅人（たなか まさと）

大阪ガスリキッド(株)常務取締役（大阪ガスより出向）。1992年、大阪ガス(株)入社。業務用エネルギー営業、社有地活用と梅田北ヤード開発などの大規模都市開発、国土交通省の政策策定や学識者へのロビー活動（東京赴任）、業務用・産業用営業での新規商材開発・拡販（ESP）などを歴任。2019年、エネルギー・文化研究所長、大阪ガス硬式野球部長に就任。以後、近畿園部長、地区支配人を務める。2024年より現職。

金澤成子（かなざわ しげこ）

大阪ガス(株)広報部大阪・関西万博プロジェクト室室長兼日本ガス協会ガスバピリオン館長。1989年、大阪ガス(株)入社。家庭用エネルギー部門で直営業、販売企画、全社組織改編の政策立案にも携わる。2007年、介護事業会社にて離職率低減に向け人事給与制度改革を実施。2010年、IT会社にて行動観察手法によるクライアントの課題解決等事業も拡大。2018年、技術統括部署にてベンチャーファウンドへの出資等全社の新規事業創出の基盤を構築。2020年、エネルギー・文化研究所長に就任。2024年より現職。

富尾博之（とみお ひろゆき）

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長。1993年に大阪ガス(株)入社。家庭用エネルギー部門で直営業。一般ガス事業者向けの天然ガス卸営業、業務用厨房機器の販売企画に携わる。その間、公営ガスの事業者の買収業務にも従事。2022年から地域共創部門でDaigasグループの社会貢献活動を管轄。次世代教育（エネルギー環境教育・防災教育・食育）や、様々な社会課題の解決に向けたNPO団体等との協働活動を推進。2024年より現職。

CELへの期待

エネルギー・文化研究所（CEL）が多彩な知と交わり、重ねてきた実跡とはどのようなものか。共同研究者、寄稿者、あるいは研究員として、40年の軌跡を支えた方々の視点からその足跡を辿り、次なる時代への期待を綴っていただきました。



生活文化を起点に、
新しい豊かさの探求を

島原万丈

Shimahara Manjio

LIFULL HOMES 総研 所長

大阪ガスエネルギー・文化研究所（CEL）

とのファーストコンタクトは、私が前職リクルート住宅総研時代の2009年、一般社団法人リノベーション協議会を立ち上げてしばらく経った頃だったので、もう20年ほど前になる。実験住宅NEXT21を見学しないかとお誘いを受け、当時テキストでしか知らなかったSI（スケルトン・インフィル）工法や建物緑化を実際に見られるということ、一も二もなくお邪魔するのが最初の訪問だった。

当時NEXT21はすでに第三フェーズの水素燃料電池システムの実証実験に入っており、わざわざと生い茂った屋上および外壁緑化の中に次世代エネルギー供給システムが挿入された集合住宅は、まさに近未来の都市型住宅そのもので、強烈な印象を覚えている。

ただ、そのインパクトが大きすぎたせいか、

私はCELに対し、エネルギーインフラ企業らしいハード・技術中心の研究機関という印象を長らく持っていた。ところが2017年、『CEL』

116号で立命館大学の加藤政洋教授との対談のご依頼を機にバックナンバーを読み返してみると、その印象は大きく覆された。なにしろ加藤教授は花街研究の第一人者であり、私の対談素材は『Sensuous City「官能都市」——都市工学や市場経済に基づく再開発を批判的に読み解いた調査レポートである。いったいここはどこな研究所なのか、という驚きがまずあった。

あらためて確認すると、CELの正式名称は「Research Institute for Culture, Energy and Life」であり、Energyより先にCultureを置く。この語順にこそ、研究所のエートスが表れているように思う。情報誌『CEL』の特集テーマは、最近のものでも「長寿社会」「文化

芸術」「伝えること／伝わること」など驚くほど多岐に及ぶが、そこには常に生活文化を起点に社会や都市の変化を読み解く姿勢が貫かれている。そう捉え直すと、NEXT21も単なる技術の実験ではなく、私たち日本人のライフスタイルの実験であったのだと腑に落ちる。

さらにCELは、「語りベシアター」や「Talkin' About」のように、建物や設備の枠を超えて都市・地域社会の「語り」や関係性にまで踏み込む実践を地道に続けている。企業内シンクタンクとしては極めて異例であり、同じく企業内で都市研究に携わる者として、率直に羨ましく感じる点でもある。

1980年代に盛んになった企業メセナの多くがPRイベントに矮小化され、企業内研究所にも短期的な成果が求められがちな昨今にあって、CELが40年もの間、生活者・文化・地域を主題に骨太の研究と発信を続けてこられたことに最大限の敬意を表したい。そして次の40年も、都市と社会の変化に寄り添いながら、新しい文化と暮らしの物語を紡ぎ続けていられることを強く期待している。



空間文化の 実践知をもとめて

加藤政洋

Kato Masahiro

立命館大学 文学部地域研究学域 教授

わたしがエネルギー・文化研究所ともっとも深く関わりを持つにいたったのは2015年のことでした。所属する立命館大学文学部から学外研究（サバティカル）の機会をえて、調査・研究に専念した時期のことです。

同年4月1日から8月31日までの5カ月間にわたる、最初にして最長期の受け入れ機関と



『CEL』116号（2017年7月）島原万丈氏との対談にて。撮影／宮村政徳

なっていたのがエネルギー・文化研究所（CEL）でした。日常的には、朝から昼過ぎまでグランフロント大阪北館ナレッジキャピタル7階のナレッジサロンを利用させていただきつつ、午後になると市域とその周辺でフィールド観察を繰り返すことが思い出されます。個人的なことで恐縮ですが、沖縄の共同研究を続けてきた親友を4月上旬に亡くし、大阪のまちを歩くことが落ち込んだ気持ちをまぎらわせる唯一の方途であったように思われます。このときほど大阪を歩きまわったことは、後にも先にもないでしょう。拙著『大阪のスラムと盛り場』（創元社、2002年）の出版以降、いくぶん薄らいでいた大阪への関心が静かに再燃しはじめたのも、このまち歩きを通じてでした。

小西池透所長（当時）や研究員の弘本由香里氏らとのミーティングを経て、まずCEL関係者向けにお話しする機会を頂戴し「都市魅力の空間学」と題して報告したのは、同年6月5日のことです。この話題提供をきっかけに、「エネルギー・文化講座2015【都市魅力シリーズ】モダン大阪都市の空間文化誌」を3回にわたって開催することになりました。

7月15日の第1回は「大阪の貌と輪郭」、8

月5日の第2回は「モダン大阪の新開地と花街」、そして同月26日の最終回は「（ポスト）モダン大阪の路地と横丁」と、それぞれ主題を掲げて報告しました。この連続3回の講座の内容をもとにして生まれたのが、拙著『大阪―都市の記憶を掘り起こす』（ちくま新書、2019年）にほかなりません。

遅筆のわたしを後押ししてくれたのが、都市空間の断片ともいべき場所・景観・空間の魅力を再発見できたことです。大阪の都市構造を機制する『キタ／ミナミ』にはじまり、横丁のある風景、葦の地方、地下街ラビリスにいたるまで。なにを隠そう、これら諸空間の魅力の再発見は、研究員のみなさんや連続講座の一般参加者とのやり取りがきっかけだったのです。とりわけ懐かしまれるのは、講座の打ち上げのあとの2次会で当麻潔氏（当時研究員・故人）や弘本氏と飲酒文化を議論したことです。のちに出版する拙著『酒場の京都学』（ミネルヴァ書房、2020年）は、ここに萌芽したといっても過言ではないでしょう。

あえて限定しますが、大阪の魅力は諸種の空間文化にある、というのがわたしの感想です。空間文化とは、たとえば長屋に暮らす人たちが編み出した独特の作法や生活の知恵、いわば実践知によって育まれるものにほかなりません。個性際立つ研究員の皆さんの探究心に敬意を表しつつ、これからも都市魅力としての空間文化の実践知を探究してください。



境界をほぐす、 柔らかな場を育てて

アサダワタル Asada Wataru

アーティスト、文筆家

近畿大学文芸学部 准教授

エネルギー・文化研究所(CEL)との関わりをふり返ると、そこには常に「場」と「人」を紹介した学びがありました。十数年前、『CEL』104号に「新しい『居場所』から余暇を再編集する」を寄稿した当時、私は「住み開き」という生活実践をどのように社会の文脈へ橋渡しできるかを手探りしていました。未整理の思考にも丁寧に耳を傾け、誌面として形にしてくれたCELの姿勢は、私にとって大切な足場となりました。

その後、同志社大学大学院総合政策科学研究科との連携講座「コミュニティ・デザイン論研究」やCELでの勉強会に繰り返しお誘いいただきました。いずれも弘本由香里さんからの声かけによるもので、彼女が生活現場と研究的視点のあいだを柔軟に往復しながら問いを立てる姿勢に、感銘を受けました。調査や制度の議論にとどまらず、日常の小さな違和感や実践の芽を丁寧に拾い上げるCELの研究文化は、弘本さんを通じて私自身の活動とも自然に響き合っていました。

印象深い記憶の一つが、2016年初夏、グランフロント大阪の都市魅力研究室でエコ住宅研究者・濱恵介さんと語り合った勉強会です。

国内外で30を超える居住経験を持つ濱さんは、住まうことを実践的に探究されてきた方でした。各都市での暮らし方や家族・仕事の変遷を伺いながら、私は「住み開き」的なコミュニティと従来の地域共同体の間にある「第三の縁」の可能性について議論しました。「ノマド」と呼ばれる生き方を圧倒的な実践量で歩んできた濱さんの経験は、空間やコミュニティをどう編集し得るのかを考える上で大きな示唆となりました。親子ほど年の離れた私が異分野からコメントできたのも、弘本さんの企画とコーディネートションの賜物でした。

一方、2008南森町という小さなサロンスペースで山納洋さんと共に行っていた活動は、生活の場とクリエイティブな議論が地続きに存在する学びの場でした。食卓の延長のような空間で表現やまちの話題を語り合う経験は、CELが大切にしてきた「生活から考える」という姿勢と自然に重なりました。

先述の同志社大学での連携講座では、冊子『コミュニティ・デザイン論研究』読本』に「表現を媒介に異なるコミュニティを越境する」を寄稿し、多様な立場同士が表現を介してつながりうることを論じる機会を得ました。また、

最終成果として刊行された書籍『コミュニティ・デザイン新論』に「ルーズプレイス―目的から自由になる、もうひとつのコミュニティ論」を寄せています。

40周年を迎えるCELに期待するのは、研究と生活の現場をつなぐ媒介としての役割を超え、立場や背景の異なる人々が同じ時間と空間に併存し、互いの経験が触れ合うことで「境界がほぐれる場所」をこれからも丁寧に育てていくことです。社会が複雑化するなかで、小さく、弱く、断片的な声は見えにくくなっています。その声をすくい上げ、社会の言葉へ翻訳し、また現場へ返す—CELにはその循環を支える独自の力があります。コミュニティと表現の実践に携わる者として、私もこれからその歩みに伴走していきたいと考えています。



ホームパーティーのような親密さで、私的空間を公共に開いた「208南森町」の実験的風景。



文化の種を、 花開かせる場所に

わかぎ るふ Wakagizuru Eru
作家・演出家

関西人は関西弁が好きだ。こんなに標準語が流通しているのに拘わらず、関西人は相変わらず関西弁を喋る。それどころか大阪人は関西の他県の言葉にすら敏感で「あの京都弁やな」「あの子は兵庫の子ちゃうか? 『あれ知っとう』とか言うし」なんて、自分たちと比較したがる。

そんなことでもええやん! とツッコミを入れたところだが、自分自身も気が付いたら言ってる時もある。テンポの良さと、軽やかな響きがないとどうも会話をした気にならないのが関西人の基本なのだろう。

声優の友人に聞くと、アニメなどでキャラの強

い役を関西弁で表現することが多いらしく、声優の勉強の一部に関西弁講座というのもあるらしい。磨れるところかますますもはやされてるようだ。三枚目や脇役が多いのはちょっと複雑だが……。

言葉は文化だ。2013年、語りベシアター「谷崎潤一郎」の回に関わらせてもらった時にも強く感じた。谷崎は関東大震災で被災して、関西にやってきた人だが、そこで上方文化の虜になって、結婚をして住み着いた作家である。彼の人生の後半は上方詞で溢れかえっていたのだろう。そして毎日、それを聞いてるうちに「細雪」のような美しい小説を生み出した。よ

く外国語を習得するなら恋をしろと言うが、まさしくそれだったに違いない。谷崎は上方に恋をして耽美的な世界を追求したのだと思う。

言葉の持つ力は、その土地に住む人の性格や、生き方も支配する。関西人の庶民中心の考え、楽しいことを分け合う文化はそこに根付いているのだろう。だからこそ阪神タイガースの応援や、英語も分からないのにインバウンドに気さくに笑いかける人が溢れているわけだ。

先日、小学校の低学年であろう子供とお母さんが近所を歩いていた。子供が「今日、から揚げ食べたい」と言うと、若いお母さんが「そうか、ほな鶏探しておいで」と即座に答えた。子供はめげずに「スーパーで鶏肉売ってるやん」と返事していたが、なんとという楽しい会話だろうかと感心して聞いてしまった。

こういう余計な一言が文化の種なのだ。私はそう思った。「から揚げが食べたい」「いいよ」だけでは母親はただ返事しているだけだが、あの親子は会話をしていった。大切なのは返事ではなく会話だ。その蓄積が文化となり、やがて人を豊かにするのだと思う。

「エネルギー・文化研究所」の皆さんに、これまで同様に小さな種を育てていく地道な活動をしていただきたいとお願ひしたい。その種を大きく花開かせていくための肥料や、水を絶やさずに、こまめに世話を焼いてほしいと思う。その辺に転がっているなんでもない詞、言葉、コトバが私たちの礎なのだから。



2013年3月、語りベシアター『谷崎潤一郎——愛と創作のジャンクション』の上演風景。関東大震災を経て関西に移り住んだ谷崎が、松子夫人との生活の中から光と闇の美をあぶり出し、名作を編み出す姿を描いた。



終演後の記念撮影。写真右端がわかぎ るふ氏、右から4人目がCEL研究員の栗本智代。文豪の生きざまと芸術性を追った公演を終え、出演者・スタッフが揃った一枚。



大阪の個性を、 豊かな暮らしの礎に

下田吉之 Shimoda Yoshiyuki

大阪大学大学院 工学研究科
環境エネルギー工学専攻教授

私にとってエネルギー・文化研究所（CEL）との初めての出会いは、大学の教員になりたての1990年代の初め頃、所属する学科の特別講演に当時の倉光所長をお招きして「ジオカタストロフィ」のお話を伺った時であった。将来の世界の破局シナリオを描くという、民間企業の研究所のテーマとしては通常考えられないような壮大なスケールのお話に学生と共に圧倒されたのを昨日のことに覚えている。

それから約20年後、情報誌「CEL」の2012年101号から2014年106号まで連載された「エネルギー講座」の監修を担当させていただくことになった。当時は東日本大震災の直後で、エネルギー問題に対する関心の高まりの中、市民一人一人にエネルギーリテラシー（エネルギーを賢く使うための基礎知識）を身につけていただくことを目的とした連載だった。連載終了の頃に、この連載を担当されていた当麻潔さんとグランフロント大阪のナレッジサロンでセミナーを開催させていただいたことを覚えている。今、当麻さんや識者による様々なテーマの記事を懐かしく読み返してみると、当時のエネルギー情勢を思い出すと共に、パリ協

定以降の世界的なカーボンニュートラルへの目標設定などこの間のエネルギーを取り巻く状況の変化を経て、市民がエネルギーリテラシーを身につけることの重要性がますます増していることを感じた。

私は、エネルギーシステムを需要側から研究している。エネルギー事業は供給側で見れば原料の調達やネットワーク技術といったビジネスと技術の世界であり、エネルギーは「MJ（メガジュール）あたりいくら」という無味乾燥な商品である。しかしエネルギー需要の側から見れば、エネルギー事業は明治以来の人々の暮らしを形づくってきた事業である。特にガス事業は照明、調理、入浴といった分野で新しい暮らし方を人々に届ける役割を果たしてきた。エネルギー消費の抑制が求められるカーボンニュートラルの時代においても、人々の豊かな暮らしを支えるサービスの観点からエネルギーシステムを考えていくことは重要であろう。

今や大阪ガスは海外事業の大きさが国内事業と匹敵する世界企業に成長した。私の所属する大阪大学が過去数十年の間ずっと掲げてきたモットーは「地域に生き世界に伸びる」である。

大阪を地盤に地域社会との強い絆を保ちつつ、国際的に活躍する人材の教育と世界レベルの研究を生み出していく大学の姿勢として私も好きな言葉であるが、大阪ガスの発展の方向性も、地域に根ざしつつ世界に向けて発展していく点では同じではないだろうか。Daigasグループが「大阪」のアイデンティティを活かし、地域から豊かな暮らしを発信していく基盤として、今後もCELの活動に期待したい。



2014年11月にグランフロント大阪で開催されたセミナーの様子。エネルギーの現状を語り、異分野の面々と新価値創造へ向け熱い議論を交わした。提供：一般社団法人ナレッジキャピタル



暮らしを支える企業の、 文化の場として

谷直樹 Tani Naoki

大阪市立大学 名誉教授
大阪くらしの今昔館・前館長

私は、大阪市立住まいのミュージアム（愛称：大阪くらしの今昔館）の企画から、開館、そして館長として運営を進める中で、エネルギー・文化研究所（CEL）の皆さまから様々な知恵をいただき、物心両面の援助を得ました。とりわけ3人の方々の思い出があります。

1992年、大阪市住宅政策課が、住まいのミュージアムの基本構想策定調査を行いました。そこにCELの副所長（後に所長）の古館晋さんが参加されました。私が「遊び心のあるミュージアム構想」を報告したところ、古館さんから大いに賛同するとの言葉をいただきました。私は意を強くして先に進むことができ、住まいのミュージアムの実現につながりました。

2001年に今昔館が開館し、研究員の弘本由香里さんにミュージアム協議会の委員をお願いしました。弘本さんは、今昔館にとって耳の痛い話もされますが、単に厳しいだけでなく、助け船を出してくれます。2012年度の大阪市の事業仕分けで今昔館が窮地に陥った時、真っ先に存続の集会を呼び掛けてくれたのが弘本さんでした。今昔館はこのご恩を決して忘れてはいけないと思います。その後2015年2月にCELと今昔館との間で包括連携協定を

締結しました。これも弘本さんのご尽力の賜物です。

3人目は2016年に所長になった池永寛明さんです。その年の秋、内閣府が実施する「オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査」への応募を薦めてくれました。弘本さんと私が1週間かけて応募の文章を練り、何とか採択にこぎつきました。翌年2月の3日間、今昔館の主催、CELのバックアップで「外国人の方と考える「和の住まい文化劇場」」を開催しました。今昔館の江戸時代の町並み展示と、国の登録文化財である吉田家住宅を舞台に、和服を着た延べ17カ国58名の外国人が参加して、書道・茶の湯・上方舞など上方文化の粋を体験しました。このイベントから外国人の目を通して大阪の住文化を見直すヒントをいただきました。

つぎは吉田家住宅の座敷を借りて、「上方生活文化堂」という塾を開きました。産経新聞社の主催、今昔館とCELの共同企画で全12回開講しました。今昔館からお宝の掛け軸や雛人形を持ち出して座敷の床の間に飾り、講義のあとは趣向を凝らした句の大阪料理に舌鼓を打ち、それが新聞の特集記事として情報発信されまし

た。上質で上品な大阪文化を体感できた至福の時間でした。その成果は、CELと今昔館との共同編集で『上方生活文化堂―大阪の今と昔と、これから』という本にまとまりました。

CELは企業内の組織なのに広報部門でもない不思議な存在です。私の専門である「住まい」に例えると、ガス事業はDK（ダイニングキッチン）、それに対してCELは「床の間」だと思います。著名な文化人類学者が「人間のすまいと動物の巣の大きな区別は、接客空間の有無である」と説いています。市民の日常の暮らしを支えるガス会社には、ハレの日の接客空間が必要です。CELはガス会社の床の間であり、「CEL」誌は季節に合わせて飾る掛け軸です。これからの発展に期待しています。



大阪くらしの今昔館・吉田家住宅で開催された「和の住まい文化劇場」の一幕。外国の人たちが大阪の豊かな住まいと暮らしの粋を肌で感じる機会となった。



濱 恵介
Hana Keisuke
EJ住宅研究者

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所Ⅱ
CELと私が出会ったのは、個人的な事情や願望が、いくつものご縁により導かれた結果である。1998年、私は日本住宅公団時代から数えて30年間勤めた住宅・都市整備公団を退職し、大阪ガスに転職した。CELに11年間勤め、非常勤を含めると16年近く席があった。

この会社には公団業務を通じて親しみと好感を持っていたが、実を言うと私はCELという特異な研究所の存在を当時は知らなかった。研究テーマには幅広い自由度があり、住宅と生活が主な研究分野の一つに位置づけられ、そこに配属されたことは幸運と言わなければならない。この研究所の本質的な役割が「収益と離れ、企業のブランド価値を高めること」にある、と私なりに理解した。

公団勤務が長くなるにつれ、私は「都市開発・住宅整備を含め全ての経済活動は、地球環境と調和した形でない限り、いずれ社会も文明も破綻する」という確信を持つに至った。この転職により、環境問題、特にエネルギーの視点から住宅と建築、さらには都市を見直す絶好の機会を得た訳だ。

エコロジカルな住宅づくりを目指す私にとって、CELは願ってもない職場であり、社外から来た者としての視点や経験を活かした。単純化すると、都市ガスの供給・販売を収益の基礎に置く企業の社内研究所でありながら「いかに少な

いエネルギー消費、または再生可能エネルギー中心で快適な住まいを実現するか」をテーマに研究し世に発信したことになる。これが許され評価されたことは、大阪ガスの度量の大ききであり、CELの役割に合致したからであろう。自己の価値観に対し純粋に素直でいられたことは、CELにおける最大の幸福であった。この素晴らしい職場を離れて十年余り、状況はかなり変わったようだ。情報誌CELからの浅い印象だが、外部識者によるコンテンツが大半となり、所員みずからの研究成果や活動実績による発信が当時より少なくなった。研究員数が最盛期に比べ半減したのだから止むを得ない面もある。

しかし、たとえ人員が少なくなってもCELの役割は依然として大きい。技術・文化の境界を超え、長期的な思考と自在の空間感覚を融合させ、CELを活躍させて欲しい。環境問題と居住のテーマは依然として重要だし、全ての分野で持続可能性を軸に考えることが必要と思う。数ある想いのうち私が最も期待するのは、将来を見通す社内研究所として、企業本体が社会的に正しく機能しているかを映し出す鏡のような機能である。具体的には、人間の際限ない願望もたらず生活の姿と、化石燃料の消費による環境への影響などエネルギー利用を一体的に論じ、望ましい暮らし方と共に事業の方向や将来像を提案することである。

我々が享受し当然と思っている現代文明の是非を問い、真に持続可能な世界を想像し、企業活動を新たな世界観に照らして展望することこそ、「エネルギー・文化研究所」ならではの存在意義ではないか、と私は考える。

築き上げた信頼を、
社会を切り拓く力に



山下 満智子
Yamashita Machiko
同志社女子大学
非常勤講師

40周年おめでとうございます。

私は1996年から2017年までCELに在籍、主に食文化を担当させていただきました。食育、調理と脳の活性化、火育(CELで創った造語、デザインと一緒に商標登録)、火のある暮らしの提案、和食文化研究など調理や火の生活文化の継承に関する研究をしてきました。

CELに転動した1996年以前になりますが、食育という聞き馴れない言葉を耳にして、当時カリフォルニアにあった支社からマクドナルドの食育グッズを送ってもらいアメリカの栄養ピラミッドなどの調査研究を始めました。食育基本法が成立する10年以上前でした。2005年食育基本法が成立して、学校教育、行政、生産者、さらに食に関係する企業にも食育に寄与する活動が求められました。『大阪ガスの食育』について営業、お客様部、料理講習室、広報、商品開発など様々な所属のメンバーと本社北館にあったCEL会議室で議論しました。食育先進企業のキックマン様にお電話して食育プロジェクトリーダーの経営企画室現執行役員の大津山厚様を講師にお招きしたことなど懐かしい思い出です。

2004年には東北大学の川島隆太教授と「料理をすることが人間の脳にいい影響を与えるのではないか」をテーマに共同研究を始めました。これも先生の本の一行から東北大学にご相談のお電話をしたことがきっかけでした。この研究は

大変大規模なものとなりました。CELがリーダーとなり先の食育プロジェクトのメンバーを中心に社内各部の協力を得ました。研究は脳科学の第一人者である川島隆太教授のネームバリューもあり、大阪ガスのユニークな研究として研究開始時から多くの新聞や雑誌等に掲載されました。さらに研究成果は大きな反響を呼びました。2008年問題といわれた高齢化に対する認知症予防への期待もありテレビ、新聞、雑誌に取り上げていただきました。学会発表も行い食生活学会に論文としても投稿し、現在も高齢者施設での厨房設備の必要性、料理活動の取り組みなどの科学的な根拠となっており、講演のご依頼も多く「調理と脳の活性化研究」は、認知症予防と調理などのテーマに社内での地域活動担当部署を中心に様々の場で講演させていただきました。

CEL在籍時、国立民族学博物館の石毛直道名誉教授、ミホミュージアム館長熊倉功夫先生、東北大学川島隆太教授、京都大学前総長の山極寿一先生はじめ各界の有識者の方々に講演や原稿、共同研究など様々なご依頼をさせていただきましたが、ご多忙の皆さまにいつも快くお引き受けいただきました。大阪ガスの活動への理解、CELが長年築いてきた活動の歴史があったからこそと思います。退職して10年、社会の激しい変化の中で社会が期待するDai-gaグループの役割も大きく変化していることと思えます。これからもCELという組織に対する期待も役割も変化していくことと思えますが、研究活動や活動を通じて得られた各界有識者の皆さまからの信頼を社会や社業に活かしていく活動をこれからも続けていきたいと強く思います。

地域の資源を生かし、 未来を照らす光へ



加茂みどり
Kame Midori

追手門学院大学 地域創造学部
地域創造学科 教授

エネルギー・文化研究所（CEL）が設立されたのは、私が入社した1986年でした。当時新入社員だった私は、CELについて、「お客様からいただいたガス代を自社の利益とするだけでなく社会に還元するために、社会に役立つ研究をする所属」と教わった記憶があります。

そのCELに、2007年11月から2022年3月まで、私が大阪ガスに在籍した最後の約14年半、所属していました。個々の研究員の裁量幅が広く、歴代の所長は研究員自身の決定をかなり尊重してくださいました。

私の専門分野は住宅計画ですので、住まいに関する研究をさせていただきました。少子高齢社会に対応した住宅に関する研究として、家族の個人化への対応や子育てへの対応、高齢者への対応、環境保全等をテーマに、実験集合住宅NEXT21の住み方研究や中間領域の研究、京都都心部のコミュニティに関する研究などをさせていただきました。

エネルギー・文化研究所の仕事は、他の研究員の方々同様、社外の方とのコラボレーションにより進めることが多く、自治体の審議会等に参加させていただくことも多々ありました。外の世界とつながることは、とても貴重な経験だったと思います。

しかし逆に、社内の方々との関わりが薄い傾向もあり、よく「何をしている所属なのかわからない」という声もうかが

いました。おそらく社外への発信に比べ、社内への発信が手薄であったのかもしれない。それを克服すべく、「CELニューズレター」の発行や「CEL研究報告会」の開催、「CEL研究報告書」の発行など、その時々総務担当者が工夫をしてくださり、徐々に社内への発信が意識されていったと思います。

CELの大きな特徴は、前述のとおり、社外とのつながりが太いことです。外からの視点でみた大阪ガスを知ることができるといって、社内では貴重な所属だったと思います。また、ガスという社会のインフラを担う企業であり、その中でも特に営業色のない特徴が、中立的な立場を確保することにつながり、多くの研究員が自治体の審議会や委員会に参加することとなったのだと思います。必ずしもガス事業と直結しない業務であったことが、よい点である一方、少し社内のも他所属と距離をおいてしまうことにもなったのだと思います。

今、私は追手門学院大学の地域創造学部で教員をする立場です。改めて、「地域」をキーワードに勉強を重ねる日々です。様々な地域がそれぞれの岐路に立たされる今、地域資源を生かし、地域文化を継承し、いかに地域を活性化しその未来を描いていくかということに、関心が高まっていることを感じます。CELの皆様には、是非ガス事業と少し離れた立場から、地域社会に役立つ研究を重ねて信頼を固めつつ、社内の方々との交流も深め、「社外の風を社内へ届け、社内の視点を社外に発信する」ことを継続していただけたらと願います。

高い志を、 いまの言葉で紡ぎ直して



豊田尚吾
Toyota Shogo

ノートルダム清心女子大学
人間生活学部
人間生活学科 教授

大阪ガスネットワーク・エネルギー・文化研究所（CEL）設立40周年、おめでとうございます。私は1998年度から2014年度まで貴研究所にお世話になりました。その間、一研究員の立場から、CELに与えられたミッションを實現しつつ、いかに社内外の理解を得るかという課題に取り組んできたように思います。個人の研究テーマの追究のみならず、研究所全体としての調査・情報発信、外部有識者との協働、サウンドメディアとしての情報誌CELの発行やWEBサイトの改変など。時々の所長のリーダーシップの下、微力ではありますがいくつかの施策に携わる機会をいただきました。それらも含めCELの活動期間は四半世紀を大きく超え、社会や企業のあり方は大きく変わっています。40周年を機に、CEL設立当時に与えられた志の高い使命がどれだけ実現できたのか、しっかりと評価をすべきだと思います。実際、企業がコストをかけて取り組むプロジェクトである以上、成果は厳しく問われねばなりません。特に業績が日々明らかになるような社内部署からは、CELの存在意義を問うような（個人的な）声があったことも記憶しています。

一方で、CELの評価軸をどのように設定するかについて、明確な定義があるわけではありません。そのため高く評価して下さる方もいれば、不必要と断じる方もおられます。私自身は長くお世話

になったからということではなく、本心から大阪ガスにCELがあつて、そしてそこに従事させてもらえてよかったと思っています。

ひとつの企業には様々な考えの人がいるからこそ多様性も生まれ、しなやかさも育まれます。企業が社会の一員として、その発展に責任を持つべきという考え、またそれにとこまでのコミットメントが必要かということについて、CELは独自の姿勢を示してきました。SDGsやESGといった時代のキーワードに、その都度対応して施策を打ち出している企業が多い中で、Daijiasグループは40年にわたり、そのような社会性に対して取り組んできた実績があります。CELが発信してきた言葉と実践の蓄積はまさしくそのエビデンスです。それは、社会から信頼されるための貴重な種ではないでしょうか。ただ私自身はそれを皆が納得できる形で説得することができなかつた（種を咲かせることができなかった）という忸怩たる思いがあります。

したがって、これからのCELに対して期待するのは、これからすること、これまでしてきたことと企業が果たすべき責任との関連付けを行ってもらうことです。CELに与えられたミッションを改めて現代的に言語化し分類し、活動がどのミッション・価値創造に対応していたかの精査を通じて体系化し、より多くの人が納得できるように形で示してほしい。それができればCELに対する評価のばらつきが収束していくと思いますし、それが40年間活動してきたCELの責任でもあります。

今後の取り組みに期待しています。

CELの40年を 振り返るための10冊

CELの40年の歩みのなかで、歴代の所長や研究員は多くの著作を手がけてきています。
そうしたさまざまな本のなかから、今号の特集の理解にもつながる10冊を紹介します。



6 『時代の散歩道』 ——倉光弘己対談集』

創刊当時の『CEL』誌に連載された対談の書籍化。初代所長倉光氏が幅広い分野の泰斗・俊秀13人を迎えて語り合う。自然と文化、衣食住、歴史・文学・芸術まで、単なる「拝聴」にとどまらず、時に丁々発止の議論を交わす内容は重厚で、また軽妙。全方位の興味と高い見識は、そのままCEL草創期の溢れるエネルギーを体現している。

倉光弘己=著
KBI出版／1990年



7 『コミュニティ・デザイン新論』

「現代社会の困難=希望をめぐる難問に挑む!」がコンセプト。人口減少、貧困・格差、災害復興、ポスト標準家族、多文化化など、地域が直面する構造的な問題に、多分野の実践者・研究者が向き合い共に考える。弘本研究員が参画し、十数年にわたったCELと同志社大学大学院総合政策科学研究科による連携講座での出会いと議論が結実。本書は2025年に第23回日本NPO学会賞を受賞した。

新川達郎=監修 川中大輔・山口洋典・弘本由香里=編
さいはて社／2024年



8 『どれだけ消費すれば満足なのか』 ——消費社会と地球の未来』

人類の欲望と消費が地球環境に与える負の影響を読み、幸せを決めるのは物量の差ではないと世に警告する一書。訳した第2代所長山藤氏は跋文に「一人ひとりが自らの責任を実感し(中略)ライフスタイルを変えること」が要請されていると記しており、世界規模の課題と生活者の視点の架橋を目指すCEL独自のスタンスの表明も見て取れる。

アラン・ダーニング=著 山藤泰=訳
ダイヤモンド社／1996年



9 『わが家をエコ住宅に』 ——環境に配慮した住宅改修と暮らし』

住宅団地の計画・設計に携わってきた演習研究員(当時)が、築27年RC造の中古住宅を購入し、環境共生住宅(エコ住宅)として甦らせた実践の記録。断熱性の改善、自然エネルギーの活用などの手法は非常に興味深い。しかし本書の核心は、その過程で省エネを「自分ごと」として引き受け、「足るを知る」暮らしへと意識が変わっていく点にある。

濱恵介=著
学芸出版社／2002年



10 『住まいと暮らしの提案50 総集編』

1988年開始のラジオ大阪『住まいの110番』の記録。既刊書未収録の内容を中心に、CELとして「主張・研究成果を集大成する意図で体系化」(編集後記)した一冊と言える。5人の研究員が語る住まいの「総論」「各論」、心豊かで個性的な「暮らし論」は、生活者の視点に立ったCELならではの今なお変わらぬ主張に他ならない。

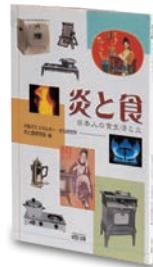
CEL“住”研究会(古館晋・隅野哲郎・石橋裕司・栗本智代・弘本由香里)=著
KBI出版／1996年



1 『炎と食』 ——日本人の食生活と火』

「炎と食」を切り口に、都市ガスの歩みを概観し、日本人の食の歴史を整理する構成。神話の考察から、人類はいつ火を利用し始めたかまで遡り、現代の食文化が形成される過程を、有識者や山下研究員(当時)らの論考により多角的に示す。ガスのコンロや炊飯器など、ガス調理機器の変遷をカラーで紹介しており資料的価値も高い。

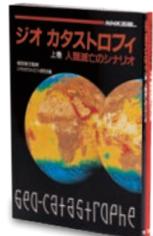
大阪ガス エネルギー・文化研究所 炎と食研究会=編
KBI出版／2000年



2 『ジオカタストロフィ』 ——上 人類滅亡のシナリオ 下 破局回避のシナリオ』

情報誌『CEL』18号の特集「ジオカタストロフィ報告書」に新たなコンテンツとデータ、写真などを加えて再構成された書籍。上巻では当時最先端の状況判断に基づいた人類滅亡のシナリオ、下巻では破局回避の困難さと進むべき道を、多彩な識者が提示している。「統合した視野の中で中長期的な研究」を目指すCELの真骨頂というべき大冊だ。

坂田俊文=監修 ジオカタストロフィ研究会=編
NHK出版／1992年



3 『上方生活文化堂』 ——大阪の今と昔と、これから』

第9代所長池永氏が、大阪くらしの今昔館館長(当時)の谷直樹氏と実施した文化講座「上方生活文化堂」(産経新聞社主催、CEL・大阪くらしの今昔館企画)をもとに書籍化。大阪の文化・歴史を紐解いてその魅力を再発見し未来へつなげるという、池永氏が掲げた「ルネッセ」実践例の一つでもある。

池永寛明・谷直樹・深田智恵子・服部麻衣、椿山一希=共著
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所、
大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)／2019年



4 『カリスマ案内人と行く大阪まち歩き』

大阪のまちに精通した、“カリスマ案内人”がガイドするまち歩きを紙上で体験できる一冊。橋爪節也氏を筆頭に、案内人たちの大阪への深い愛情と個性があふれる語り口が再現されており、見知ったはずの“通り”や“筋”、施設、建築物などの意外な表情を再発見できる。同時に、まちの文化的・歴史的財産を未来へ継承していくことの重要性と意義を感じさせられる。

栗本智代=著
創元社／2013年



5 『悠々と生きる』

第3代所長古館氏が『大阪新聞』に約1年にわたって連載した随筆コラムをまとめた一冊。環境をめぐるミミズと人類の対比、老いて高まる能力、シルクロードのラクダ考、賢さと金持ちの不幸、そして人間と時間と宇宙……明快な文で語られるさまざまなエピソードは、古館氏自ら「所内での長年の種々な議論」の賜物と述べる。当初から「創造の場」を掲げたCELの雰囲気が感じ取れるようだ。

古館晋=著
KBI出版／2003年



再見

上町台地今昔タイムズ

第4回
(最終回)

生々流転の地、野生の都市。 大阪から未来へ

弘本由香里
Hiromoto Yukari

歴史都市・大阪の背骨に当たる上町台地をフィールドに、

2013年秋から2024年春にかけて、約10年にわたり20号を編集・発行した

『上町台地今昔タイムズ』。過去の対話を通し、現在を見つめ直し、

未来へつなぐ歴史実践として、改めて共有したい観点を取り上げてレビューする。

はじめに

—四天王寺門前の物語から—

前回、本連載第3回では「四天王寺から紐解く、遍く救済・再生の物語」をテーマに、『上町台地今昔タイムズ』（以下、今昔タイムズ[*1]）Vol.18と、『上町台地今昔フォーラムVol.18 Document』[*2]にフォーカス。受難と再生の物語の舞台として、数々の戦火や災害に見舞われながらもその都度よみがえり、

時代とともに変化しながら人々の心とともにあり続けた、救済・包摂の場、アジールとしての四天王寺の姿を見つめた。

とりわけ、中世の民衆の語り芸能・説経節の代表作のいくつかに描かれた、四天王寺門前で繰り広げられる哀話と救いの物語。苦しみの境涯から光の指す方向へ人生が転換する、象徴的な場面に注目した。その一つ「しんとく丸」[*3]は、河内国の「高安長

者伝説」をもとにつくられたものだが、同じ伝説に依り室町時代に生まれた能の演目に「弱法師（よろほし）」がある。説経節の「しんとく丸」と

違い、能の「弱法師」は四天王寺の門前に舞台を絞っている。盲目の物乞いとなった俊徳丸が、極楽の東門と呼ばれる西門・石の鳥居の中に沈む夕陽を拝み、西方浄土を想念する、日想観の情景をうたい上げ、春の彼岸の救いの物語へ昇華する、600年以上の

時を超えて生き続けている名作だ。また、近世には浄瑠璃・歌舞伎の俊徳丸と継母の物語「摂州合邦辻」も生まれ、今も人気を博している。

時代はさらに下って、同じ伝説の源流に遡って創作された短編小説に、折口信夫（おりにくちのぶ、1887-1953、以下折口）の『身毒丸（しんとくまる）』（1917年）がある。田楽法師の子・身毒丸が、業病の宿命を背負いながら、田楽一座の一員として旅する暮らしの中に、古代以来の芸能文化を描いている。

折口は、国文学と民俗学を独自の感性で結びつけ、過去と現在をつなぐ古代学を切り拓いた、日本の近代を代表する学者の一人であるとともに、異能の芸術家でもあった。自らの研究成果に基づく小説を書き、学問と社会を接続することを試みた。また、釋道空の名も持ち、歌人や詩人として自らの思想に根差す作品を数多く世に問うた。けれど、折口学とも称されるコスモロジーの原点が、大阪・上町台地にあったことは、一般には

意外に知られておらず、残念なことに故郷・大阪ではほとんど忘れ去られている。

今回、連載第4回（最終回）では、「かの国文・民俗学者にして歌人 折口信夫」釋道空を生んだ「野生」の都市・大阪と上町台地をゆく」をテーマに、折口の大坂での歩みを追った、今昔タイムズVol.19（図1・図4）を中心として、折口学を生んだ大坂のコスモロジーを見つめ、その風景の先に未来を想観したい。

「野生を帯びた都會生活」という言葉が意味すること

大坂の歴史・地理的特性と不可分で形成されてきた、大坂の気風の核心を突くものと思われる「野生を帯びた都會生活」という言葉。大阪出身の折口自身による大阪評であることを、筆者が初めて知ったのは、2017年9月、大坂のまちのお地藏さんと地藏盆について、大阪民俗学研究会代表の田野登氏に講演いただいた、上町台地今昔フォーラムVol.18[*4]でのこ

津西一丁目に生まれた。代々
 医院と薬種屋を営む家で、雑
 貨も商っていた。父・秀太郎
 を通して、折口は幼い頃から
 万葉集や百人一首などを口伝
 に習い、和歌に親しんで育っ
 た。小学校時代には、お遣い
 のお駄賃を握りしめ、道頓堀
 や千日前に向かい、芝居に夢
 中になった。中学生になると、

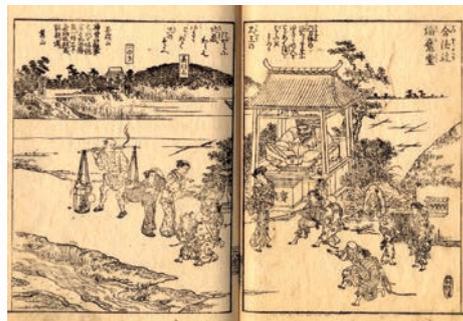


図3『摂津名所図会』(1796年)から、「摂州合邦辻」の舞台として知られる「合法辻・焰魔堂」境界の様子。近景には間廣大王と地蔵の前で祭りの日に子らが縄で道行く人を留めて銭を乞う風俗が、遠景には茶臼山や一心寺や相坂(逢坂)清水が描かれている(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)。

文芸サロンの様相を呈す心齋
 橋筋の書店・金尾文淵堂に足
 しげく通い、文学を志す若者
 たちの空気に触れ、薄田泣菫
 の第1詩集『暮笛集』や、与
 謝野鉄幹・晶子も寄稿してい
 た雑誌『小天地』などに、心
 をときめかせていた。

12歳で入学した大阪府立第
 五中学校(後の旧制天王寺中学
 校)は、自宅から東へ約2キ
 ロメートルの上町台地上に
 あった。6年間往復したこの
 通学路が、折口少年の心に与
 えた刺激は計り知れない。台
 地の西方には夕陽が沈む海が
 広がり、東方には河内・高安
 の里へ続く俊徳道が走り、そ
 の先には信貴の峰、二上山、
 葛城・金剛の山々が連なる。
 自ずと古代へと誘われていく
 眺望だ。

この通学路には、もう一つ
 大きな特徴があった。折口は
 『自選年譜』で「江戸時代以
 来の貧窮街、長町裏・又は合
 邦ヶ辻(図3)、家隆塚と伝へ
 る夕陽ヶ丘・勝曼院・巫子町
 を」通ったと振り返っている。
 台地の坂を上り下りし、都市
 の周縁に生きる、多様な人々

が暮らす世界を横断して、自
 宅と学校の間を行き来する。
 日々の経験から得た視座は、
 後の芸能論や「まれびと」の
 概念に深く結びついている。
 今昔タイムズVol.19
 では、折口少年の通学ルート
 を推定しているオダサク倶楽
 部代表の高橋俊郎氏に「上町
 台地と折口信夫の原風景(少
 年折口信夫が歩いた跡を訪ねて)」
 について解説いただいた(図
 4)。とりわけ高橋氏は、「若

き折口にとって、特に印象的
 だった光景があった」として、
 「それは、上町台地の西方に
 陽が沈む荘厳なる光の風景で、
 私には、これが彼の思想形成
 にも大きく影響しているの
 ではないかと思えます。折口の
 唱えた概念のうち、主なもの
 に『山中の他界』と『西方の
 常世』の二つがあります。両
 者共に沈む夕陽と関係するイ
 メージでした。前者は小説
 『死者の書』にも描かれた山

越阿弥陀や當麻曼荼羅に、後
 者は西の海の彼方にある他界
 『常世』に、それぞれつなが
 る考え方でした。」と述べて
 いる。
 おわりに「まれびと」と
 生々流転の風土」
 折口は、常世(他界)から
 やってきて、幸福をもたらす
 来訪神としての「まれびと」
 と人々の関係の在り様に、日
 本文化の特性を捉えた。「ま

少年を魅了した風土から折口学へ
 幼少から和歌や俳句を口伝で学び、小学時代にはお遣いの
 お駄賃を握って道頓堀や千日前の芝居に夢中になり、思春期には心齋
 橋筋の書店・文淵堂に足しげく通い、文学を志す若者の折口少年、6年
 間往復した折口少年の通学路は、自宅から東へ約2キロ、上町台地
 上にあつた。6年間往復したこの通学路が、折口少年の心に与えた
 刺激は計り知れない。台地の西方には夕陽が沈む海が広がり、東
 方には河内・高安の里へ続く俊徳道が走り、その先には信貴の峰、
 二上山、葛城・金剛の山々が連なる。自ずと古代へと誘われていく
 眺望だ。

折口学は、折口少年の通学路から得た視座、日々の経験から得た視座、
 後の芸能論や「まれびと」の概念に深く結びついている。今昔タイムズ
 Vol.19では、折口少年の通学ルートを推定しているオダサク倶楽部代
 表の高橋俊郎氏に「上町台地と折口信夫の原風景(少年折口信夫が歩
 いた跡を訪ねて)」について解説いただいた(図4)。とりわけ高橋氏は、
 「若き折口にとって、特に印象的だった光景があった」として、「それは、
 上町台地の西方に陽が沈む荘厳なる光の風景で、私には、これが彼の
 思想形成にも大きく影響しているのではないかと思えます。折口の唱
 えた概念のうち、主なものに『山中の他界』と『西方の常世』の二つ
 があります。両者共に沈む夕陽と関係するイメージでした。前者は小
 説『死者の書』にも描かれた山越阿弥陀や當麻曼荼羅に、後者は西の
 海の彼方にある他界『常世』に、それぞれつながる考え方でした。」と
 述べている。

おわりに「まれびと」と生々流転の風土」
 折口は、常世(他界)からやってきて、幸福をもたらす来訪神として
 の「まれびと」と人々の関係の在り様に、日本文化の特性を捉えた。
 「ま

図4『上町台地 今昔タイムズ』Vol.19(2023年 春夏秋冬号) 2面。
 左の二次元コードから、紙面の閲覧ができる。

れびと」は、遠来の神であることもあれば、ご先祖様であることもあれば、「ほかびびと」や「巡遊伶人」と呼ばれた流浪の芸能者たちも含まれた。町や村を巡りながら、家々を祝福して回る門付けの芸や、寺社の境内などで行われた説経節や講談や落語や俄（にわか）、相撲や浄瑠璃などさまざま。それらの超越的な聖性を宿すと同時に、差別にもさらされた「ほかびびと」や「巡遊伶人」たちに、折口はとりわけ深い眼差しを向け、文化の周縁に置かれてきた彼らの営みを、文化史の基層にしっかりと位置付けて評価した。

国文学者で國學院大學教授の上野誠氏は著書『折口信夫「まれびと」の発見』（幻冬舎2022年）のあとがきで、次のように折口を評している。「常にこの人は、アンチの道を選ぶ人なのだ。常に、マイノリティーの立場から、反発する心で学問をしている人なのである。（中略）短歌創作でも、主流のアララギ派とは、途中で決別した。神道研究で

も、けっして主流ではなかった。民俗学でも、柳田國男を思慕しつつも、柳田の方法とは正反対の方法を取った。官学に対しては、私学の立場から発言した。また、性的にも、マイノリティーであった。常に、下位者や弱者、マイノリティーの立場に立って、上位者や強者に対して、恨む心で学問をしてきた人なのだ。」

間違いない、その感性や思想の土壌は、幼少期・少年期の大阪での経験によって耕され、折口学の種を宿している。折口の独創のスピリッツこそ、「野生」の都市・大阪の賜物と言ってよいだろう。折口が大阪で暮らしたのは、生まれてから18歳までと、東京の國學院大學に進学・卒業後、一時帰阪し大阪府立今宮中学校の嘱託教員を務めた23歳から26歳まで。人生の過半は東京で暮らし、國學院大學を拠点に研究や創作に取り組んでいる。しかし、前述の茂吉への手紙でも「わたしは都會人で、併し、野性を深く遺傳してゐる大阪人でありませう」と明言するほど、大阪人の

DNAを強く意識していた。折口が可能性を見出そうとした大阪の「野生」とは、常に生々流転し、聖俗、貴賤、新旧……、異なるもの、流れるものを「まれびと」として受け入れることによって、新しい文化を生み出す風土である。社会の分断が際立つ今こそ、必要とされる都市の在り様だ。

さて、当連載を締めくくりに当たって、折口も幼い日におそらく目にしたであろう、中世の歌人・西行が大阪の原風景を詠んだ歌を記しておくたい。「津の国の難波の春は夢なれや 蘆のかれ葉に風わたるなり」。新古今和歌集では冬の歌とされ、枯れ果てた世界を強調する解釈が一般的だが、「西行物語絵巻」では春の詞書とともに描かれている（図5）。書誌学者・日本文学研究者で生粋の大阪人でもあった肥田皓三氏（1930-2021）は、このびょうびょうたる冬枯れの蘆の景色の向こうに、早春の明るい日が差しきらきらと光る海の景色を展望された。その姿勢

こそ、「野生」の都市・大阪の未来を拓くものであり、混沌の時代に光を見出す地であれと、「まれびと」の声が聞こえてくるようだ。



図5『西行物語絵巻』から、鎌倉時代に西行法師（1118-1190）が上町台地を通った際、難波の広大な蘆原に心動かされ詠んだとされる歌「津の国の難波の春は夢なれや 蘆のかれ葉に風わたるなり」の場面（国立国会図書館デジタルコレクションより）。

注

- *1 『上町台地今昔タイムズ』のバックナンバーは、大阪ガスネットワーク（株）エネルギー・文化研究所のホームページで公開している。なお、Vol.19の参考文献は同紙の1面下に記載。https://www.og-ecai.jp/project/uocto/ewent2_kon.html
 - *2 『上町台地今昔フォーラム Document』のバックナンバーは、今昔タイムズと同じホームページで公開している。
 - *3 説経「しんとく丸」では、高安長者の子・しんとく丸が継母の呪いによって宿病に侵され、絶望の淵に陥るが、四天王寺を重要な舞台に、許嫁の乙姫の献身的な愛と観音の靈力に救われ、最後は父とともに河内国高安に帰ることができるとも。
 - *4 上町台地今昔フォーラム Vol.18 『大阪のお地蔵さん』に学ぶ、まちと暮らしの今昔物語』は2017年9月10日（日）に開催。田野登氏による基調講演のテーマは「大阪のお地蔵さん」の歴史・民俗を紐解く。『上町台地今昔フォーラム Document』Vol.18 に収録、今昔タイムズと同じホームページで公開している。
 - *5 初出は『アララギ』第十一巻第六号（1918年6月）。
- ひろもと・ゆかり
大阪ガスネットワーク（株）エネルギー・文化研究所研究員、住宅建築専門誌『新住宅』編集員等を経て、1992年から大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所（CEL）研究員。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組む。共著に『大阪新・長屋暮らしのすすめ』『地域を活かすつながりのデザイン―大阪・上町台地の現場から』（ともに創元社）、共編著に『コミュニティ・デザイン新論』（さいはて社）など。

写真家と大阪

第4回

畑中章宏

百々俊二

日本の写真史にその名を刻んだ大阪の偉大な写真家たち。その写真家が写し出した作品から、大阪の都市の様相を振り返る。第4回は百々俊二の《阿倍野区美章園》。

はたなか・あきひろ 1962年大阪生まれ。民俗学者。編集者として『月刊太陽』のほか、荒木経惟、佐内正史、石川直樹らの写真集を手がける。著書に『天災と日本人』、『21世紀の民俗学』、『死者の民主主義』、『廃仏毀釈』、『宮本常一』、『関東大震災』、『新・大阪学』ほか、共著に『宮本常一と写真』がある。

大阪の近代の痕跡が残る 下町を写した作品

大阪市城東区関目^{せきめ}で生まれ育った百々俊二（1947）は、九州産業大学芸術学部写真学科卒業後、東京写真専門学校教員を経て、大阪写真専門学校^{（現在の大阪ビジュアルアート・アカデミー）}教員となり、1998年同校学校長に就任。2015年には入江泰吉記念奈良市写真美術館館長に就いた。写真集『楽土 紀伊半島』で日本写真協会年度賞、写真集『千年楽土』で第24回伊奈信男賞。写真集『大阪』では第23回写真の会賞と第27回東川飛弾野数右衛門賞を受賞した。《美章園》を収めた『大阪』は262×262

ミリの大判で全188頁。道頓堀や鶴橋、西成といったいかにも大阪らしい場所ばかりでなく、旭区^{あさひ}の千林、阿倍野区の天王寺町北・南といった下町にも、8×10インチの大型カメラのレンズが向けられている。

「撮影のきっかけは自分の生い立ちの記憶から始まりましたが、大阪では、近代の歴史の痕跡が、案外と消えず界限ごと残っているように感じました。大阪の半世紀を資料としていま見届ける、そんな写真作業になったと思っています。」（『大阪』「あとがき」）

大正時代に開発された 住宅地「美章園」

写真に写る「美章園」は、大阪市阿倍野区北東部の名。大阪商工会議所第8代会頭で、「関西大学中興の祖」と呼ばれる山岡順太郎が、1921年に父・山岡美章の名にあやかった「美章土地株式会社」を設立、住宅地「美章園」を建設して、美章園駅の建設費を寄付したことに始まる。

美章園駅は、JR西日本（西日本旅客鉄道）阪和線の起・終点である天王寺駅の次駅にあたる。写真左側は、かつて、自動車専用道「大阪泉北線」が計画され、現在は都市計画道路「天王寺大和川線」の予定地で、長らく更地のままだが、美章園駅の南隣の南田辺駅近くに住んでいた筆者にとっては思い出深い風景だ。





百々俊二《阿倍野区美章園 2008.11》所蔵／作家蔵

●食都・大阪が育んできた、都市と胃袋の物語。

大阪の胃袋

第13回

豆は豆でも——うすいえんどうの豆ごはん

湯澤規子 YUZAWA Noriko
画 竹田嘉文



ごはんに炊き込む翡翠色の真珠

野菜売り場で出会うと小躍りしたくなるもの。私にとってその一つは、春先に店頭で並ぶ「えんどう豆」だ。ふっくらとしたさやの筋をすいーつと引くと、パンとはじけるように中からコロコロと丸い豆たちが転がり出てくる。まるで翡翠色の真珠のよう、とうっとりしているのは、もしかして私だけだろうか。

なぜえんどう豆で小躍りしたくなるのかというと、それは「豆ごはん」を食べられるからだ。いそいそと買って帰り、さやから豆を出す。この作業もまた楽しい。その豆を洗った米と一緒に炊飯器に入れ、酒と塩でごく薄めの味付けをしてスイッチを入れる。炊飯の湯気から漂う豆の香りを吸い込むときの幸せといったらない。湯気に「春が来た」ことを告げられる台所でのひととき。そんな一幕を演出するのが豆ごはんの魅力でもある。

とはいえ、関西人以外からすると、「豆を炊き込むなんて、おいしいとは思えない」という人もいるそう。それはきつと、缶詰グリーンピースやシュウマイの上に載っている硬めのあの一粒の味と食感を思い浮かべているからなのかもしれない。「おいしいとは思えない」という人にも、この春にはぜひ、さやから転げ出てきたばかりのえんどう豆を炊き込んだごはんの味を堪能してみてもらいたい。

幻の炊き込みご飯

と力説しつつ、ひとつ告白すると、大阪の豆ごはんといえど、一緒に炊き込むその豆は「うすいえんどう」という種類のえんどう豆なのだということ、最近母と話している時に初めて知った。

関東に住みながら父母や祖父母の影響で大阪の胃袋育ちと自称する私であるが、「うすいえんどう」について知らなかったのは迂闊であった。というのも、毎年春に「今年も豆ごはん炊けるで」と私が嬉々として買って帰るその豆は「うすいえんどう」ではなかったからである。私からさやつきの豆を手渡された母が、私が小躍りするほどには喜んでいなかったのは、じつはそういう訳だったのかと今更ながら合点がいった。これだけロジスティクスが発達した世の中であっても、需要が少ないからなのか、関東の野菜売り場で「うすいえんどう」を見かけることはほぼ皆無なのではないか。言い訳がましいが、私が長らく豆は豆でも「うすいえんどう」と出会うことがなかったのは、仕方のないことだったのかもしれない。

大阪の野菜で関東では売ってないものといえば、「青ネギ」もその一つだ。自営業の仕事を退職してから私たちの近所に引越してきた祖父母は生粋の大阪の胃袋の持ち主だったため、祖母は「青いおネギがないねんナ」といつつ、借りた畑にせっせと青ネギの種を蒔いていた姿を思い出す。ネギ焼き、肉天焼きを私たちに食べさせるためである。そんな祖母でも「うすいえんどう」は育てていなかったから、「大阪の胃袋の飛び地」である私たちの家族の食卓界限でも、うすいえんどうの豆ごはんは幻の炊き込みご飯になっていたのだった。そう考えると、この春はぜひともこのえんどう豆を手に入れなければ、という気になってくる。

うすいえんどうが来た道

うすいえんどうの歴史は今から100年以上前にさかのぼる。大阪府の南東部に位置する河内平野の内側、羽曳野市の碓井地区が発祥の地と伝え

られ、その地名が品種名「碓井豌豆」の由来でもある。2008(平成20)年には「なにわの伝統野菜」に認定された「*1」。『羽曳野市史』によれば、碓井に住んでいた松倉貢という人物が導入の祖であるという。大阪府立勝山農学校の出身であった松倉氏が兵庫県加古郡農事試験場長を務めていた頃、粒が大きくておいしい豌豆種を見つけた「*2」。この品種は1902(明治35)年頃にアメリカから入手したBlack Eyed Marrowfatという品種を選別改良して得られた品種であつたらしい「*3」。松倉氏がそれを郷土碓井の親戚に試作してもらおうと、この品種がほかに比類なき良種だと認められて、碓井地区全体で栽培されるようになった。大阪や堺の市場で好評を得ると、次第にその名が知られるようになったという。大阪府食糧増産家庭農園協会が1946(昭和21)年に刊行した『菜園』という雑誌には、えんどう豆にはいろいろな種類があること、その中で碓井豌豆は「奈良県で育種改良されたもので大阪付近で最も多く栽培され、ムキ豌豆として使用されることが多い。草丈五、六尺に伸び強健豊産で、粒が大きく、花は白色」と説明されている「*4」。

ほかの作物を栽培した後の「裏作」に有利であるという点も重要だった。さらに、マメ科植物は多くの肥料を施す必要がなく、土地の肥沃度を上げることも評価され、田畑はもとより、畦畔、山麓の荒蕪地でも栽培が奨励された「*5」。これらが大阪府農事試験場の技師によって共有された情報であることを考えると、当時、うすいえんどうは育ちやすく多くの収穫がある作物として重宝されたのだろう。私たちの胃袋に届く野菜たちは、国や地域の境を越えながら人知れず品種改良の試行錯誤が重ねられ、「これぞ」という食味が残って

きたことにあらためて気づかされる。うすいえんどうはその後、和歌山県にも伝わってさらに改良され、「紀州うすい」という名で栽培されている。現在では全国生産量の一位は同県が占めている。

この春こそは

大阪の胃袋の飛び地である実家で親しんだ料理の本、大阪の料理研究家、土井勝さんの本には「えんどうごはん」という名前でレシピが載っている。豆は豆でもやっぱり「うすいえんどう」なのである。えんどうはさやつきを求め、使う直前にさやから出すこと、お米と一緒に炊くこと、味付けは塩だけというシンプルなレシピ。聞いた話によると、「さや」をのせて炊くと味に奥行きが出るのだとか。よし、この春こそは、と息巻く私。実家の母は、うすいえんどうの懐かしい味に思わず小躍りしてくれるだろうか。今から春が待ち遠しくしかたがない。

注

- *1 碓井豌豆「なにわの伝統野菜」<https://www.osaka-museum.com/spot/search/?act=detail&id=522>
- *2 羽曳野市史編集委員会編『羽曳野市史 第9巻 史料編4』羽曳野市、1985年、505～506頁。
- *3 料理の語源探訪Hd.https://www.osaka-eiyoushikato.jp/yomoyama/pdf/yn_002.pdf
- *4 大阪府食糧増産家庭農園協会編『菜園』1946年、大阪府食糧増産家庭農園協会、22頁。
- *5 財団法人富民協会編『富民協会報』11月号、1935年、財団法人富民協会、36頁。

ゆざわ・のりこ 法政大学人間環境学部教授。1974年、大阪府八尾市生まれ。3歳で東京、千葉へ転居したが、祖父母や両親の影響を色濃く受けた食環境により「大阪の胃袋」育ちを自負。「ウンコはどこから来て、どこへ行くのか——人糞地理学とはじめ」(ちくま新書)、「焼き芋とドーナツ——日米シスターフッド交流秘史」(KADOKAWA、第12回河合華雄学芸賞受賞)、近刊『地球のまかないごはん——食・農・風景をめぐる任復書簡』(共著、農文協)など、食や排泄といった人間の根源的な生命行動から都市文化を論じた話題作を続々発表。

研究員からのメッセージ

CEL設立40周年に際し、研究員がそれぞれの立場から、これまでの歩みと今後への思いを綴ります。生活者の視点をもって、実践と研究の現場で積み重ねてきた経験を糧に、CELはこれからも問いと向き合っていきます。

『生活者』という言葉に込められているもの



山納 洋
Yamanashi Hiroshi
大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所所長代理・研究員。1993年、大阪ガス(株)入社。神戸アートビ

レッジセンター(現・新開地アートひろば)、扇町ミュージアムスクエアなどの企画・プロデュース業務を歴任。2010年より近畿圏にて地域活性化、社会貢献事業に携わったのち、23年より現職。

『CEL』58号(2001年9月発行)の特集「生活者再考」では、お茶の水女子大学名誉教授で社会学者の故・天野正子氏に論考を寄せていただいていた。天野氏はその中で、1980年代から90年代にかけてバズワードになっていた『生活者』という言葉が、どのような時代状況のもとで、どのような問題や関心を担って登場してきたのかを明らかにしている。この言葉の内には「暮らし方」「対抗性」「共同性」への志向が込められており、「消費者」という枠に閉じ込められた現代人のありようを問い直す視点となり得る。生きる現場と乖離することなく、日常性を変える実践を積み重ねていくことこそが、『生活者』の本分である。私たちはなぜ『生活文化』を研究し続けてきたのか、そしてこれから何を問うていくのか。今回この特集号をまとめるにあたって発見したこの言葉の深みを胸に、さらなる研究と実践を進めていきたいと考えている。

街の記憶を掘り起こし、伝え今に繋ぐという実践



栗本智代
Kurimoto Tomoyo
大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1988年大阪ガス(株)入社後、91年より現職。94年より、

関西の活性化を目指す取り組みの一環として、わがまちの歴史・文化やエピソードを、語りと映像と音楽による独自の手法でわかりやすく伝える「語りベシアター」公演活動を展開。

関西、中でも大阪の街には数多の歴史や文化があるが、伝承力が弱く街の記憶が失われつつある。それらを掘り起こし、地域の魅力創出へ活かしたいとこれまで活動を重ねてきたが、同様の問題意識を持つ社外の方々の助けが不可欠であった。まだ若輩の頃、研究会を立ち上げた際も、大学の先生や他社のリサーチャーなどみな快く知恵と汗を提供してくれたのは、CELへの信頼が基盤にあったからだと感じている。

発信手法のひとつとして「語りベシアター」の公演を展開しているが、2019年9月に実施したシンガポール公演は、貴重な経験であった。異国のお客さまに大変好評をいただき、大きな自信につながった。実現に向け多くの関係者に尽力いただき、励まされてとても心強かったことを思い出す。改めて御礼を申し上げたい。今後も、街や「場」づくりを担う方々と新たなタグを組みながら、CELならではの視座を活かして摸索と発信を続けていきたい。

生活者と文化の視点で問い、現場に根差した研究を



弘本由香里

Hiromoto Yukari

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1992年から大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(CEL)研究員。歴史・生活・文化の視点から、都市居住やコミュニティの持続的発展につながる情報発信等に取り組み。共編著に『コミュニティ・デザイン新論』(さいはて社)など。

日本の住宅の近代化と戦後復興期を駆けた『新住宅』という住宅建築専門誌があった。バブル崩壊とともに廃刊に至るまでの数年間、私は編集員を務めた。その縁がきっかけで、思いがけないCELでの研究員人生がスタートしたのだが、それは畢竟、近代化や戦後復興を、生活者の眼で問い直すことにもつながっていった。

もうひとつの転機が、1995年の阪神・淡路大震災だった。避難先の大阪市内に住まいを移し、大阪市民となって大阪市立住まい情報センターや大阪くらしの今昔館の開設に関わる道を選んだ。目指したのは、市民と専門家等の協働による都市居住文化の再生。それらの経験から、NEXT21が立地する上町台地境界での、コミュニティ・デザインの協働的実践研究が生まれ、今、次世代へのリレーも視野に入ってきた。テーマはフィールドにあり、領域や属性を横断し、新たな方法論を探る。それこそ、CELならではの使命だと改めて思う。

正解のない時代に、エネルギーを考える



前田章雄

Maeda Akio

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1991年、大阪ガス(株)入社後、産業用エネルギー部門で主に工業炉の営業、企画、設計、メンテナンスに従事。2019年より現職。エネルギーと産業の関わりについて、広く情報発信をしている。

ウクライナ侵攻をはじめとした国際関係など、昨今のエネルギーを取り巻く情勢は劇的に変化しています。また、エネルギー問題とは正解がない問題を解く一面もあります。立場が変われば意見も変わる。そこで、エネルギーを取り扱うためには広い視野、多くの視点で情報を得ることがベースになると考えています。

私は、エネルギー全般をとらえた情報から未来のあり姿を考えるきっかけづくりを目的としたエネルギー勉強会の開催や情報発信をしています。今年度は、生活に密着した身近な歴史から未来に活かす視座を得ようと『エネルギー視点の大阪ヒストリー』を討議する社外研究会を立ち上げました。自然エネルギーしかなかった古代・中近世から化石燃料に目覚めた明治維新を経た先人の経験から何を読み解くのか。CELが培ってきた40年の歴史に恥じることなく、さらに進化できるように社内外の知恵を結集させた動きを実践していきたいと思えます。

40年の歩みを受け継ぎ、次の時代へと歴史を紡ぐ



小西久美子

Konishi Kumiko

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー・文化研究所研究員。1991年、大阪ガス(株)入社。家庭用エネルギー部門で直営業、技術提案を経験後、地域開発関連部署で社有地開発・都市開発に関する業務に従事。その間、民間「ペロップ」、URに出向し都市再生事業などを経験。技術士(建設部門・都市及び地方計画)、一級建築士。

私がCELに入ったのは2022年4月、まもなく丸4年になる。以前よりCELの存在は知っていたが、文化的でアカデミックな組織という印象で、まさか、自分が『そちら側』に行くとは思ってもみなかった。実際、入ってみると、文化的でアカデミックで専門的であることは確かだが、理論だけでなく「生活者目線」の「実践」を重んじていることを強く感じている。

今回、歴代所長や研究員に話を聞く機会を多く得たが、この研究スタイルこそが設立当初から目指してきたもので、長い歴史の中で成果を積み重ねてきたことを、改めて認識した。「過去は作れない」。ある元所長の言葉であるが、CELが40年間積み重ねてきたものの意義もそこにあると感じた。脈々と受け継がれてきた40年という糸の中で、私はまだ「点」にもなっていないが、歴史を紡いでいく役割だけはしっかり担っていききたい。過去にとどまることなく、歴史の中に未来の種を見つけていけたらと思う。

CEL ホームページ

<https://www.og-cel.jp/>

エネルギー・文化研究所 (CEL) の活動内容や情報誌「CEL」バックナンバーをご覧になれます。

※CEL ホームページに掲載する「読者アンケート」にご協力願います。下記の二次元コードで読みとることもできます。



Facebook ページ

<https://www.facebook.com/osakagas.cel>

note コラム

<https://note.com/ognwcel/>

volume138
March 2026

特集

エネルギー・文化研究所の40年

2026 (令和8)年3月1日発行

発行

大阪ガスネットワーク株式会社
エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046
大阪府大阪市中央区平野町4-1-2

発行人

富尾博之

企画・制作

小西久美子

編集人

日下部行洋 (平凡社)

編集

株平凡社

アートディレクション & デザイン

okamoto tsuyoshi +

校正

朝日新聞総合サービス株

印刷・製本

株東京印書館

お問い合わせ窓口

大阪ガスビジネスクリエイト株
TEL 06-6205-4650
FAX 06-6205-4759
CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for Culture, Energy and Life
©2026 OSAKA GAS NETWORK CO., LTD.

※禁断転載複製

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスネットワークの見解を示すものではありません。

※本誌掲載の寄稿文は、原則として執筆者の原文を尊重し、そのまま掲載しています。

※エネルギー・文化研究所は、1986年4月に大阪ガス株の企業内研究所として発足し、2022年4月1日以降は大阪ガスネットワーク株の企業内研究所として活動しています。そのため、2022年3月以前については大阪ガス株、2022年4月以降は大阪ガスネットワーク株での活動として表現しています。

CELからのメッセージ

ふる たず 故きを温ねて、新しきを知る

大阪ガスネットワーク株式会社 エネルギー・文化研究所

所長 富尾 博之 Tomio Hiroyuki

エネルギー・文化研究所(CEL)は、2026年4月1日に設立40周年を迎えます。40年の歩みの中で、多くの挑戦と成果を積み重ねることができたのは、ひとえに皆様方の温かいご指導とご支援の賜物であると感謝いたしております。

『CEL』138号では、CELの過去40年間の歴史を振り返りました。企画・制作にあたり、これまでCELを支えていただいた諸先輩方の取り組みや想いを伺いました。第6代多木所長は、CELの社内評価を高めるべく「コミュニケーション戦略」と銘打ち、研究会やシンポジウムなどで社内を巻き込み、イントラネットを活用した発信強化にも尽力されました。第7代木全所長は『CEL』誌の2度にわたるリニューアルを通じて「大衆化」路線を推進。常にわかりやすく伝える努力を惜しまないことをCELのメンバーに説き続けられました。第9代池永所長は、CELの使命は過去ではなく未来にあり、徹底して現代を見据え、そこに埋め込まれた未来の種を掘り起こす存在であるべきと語られました。また、企業内研究所である「サントリー不易流行研究所」「サントリー次世代研究所」において20年間近く調査研究に携わられた学校法人追手門学院の佐藤理事は、小さな研究所ほど「拠って立つところ」、すなわち、ミッションが重要であると述べられました。これら諸先輩方からいただいた示唆は、私たちが今後どの方向に進むべきかを議論する貴重な機会ともなりました。

次号の139号から141号にかけては、『住まい・暮らし』『都市』『エネルギー・環境』という、CELの原点ともいえるテーマで特集を予定しております。これまでの研究の蓄積を振り返りつつ、現メンバーそれぞれの研究分野の中にある共通点や相違点、バックグラウンドや人脈など、CELにおけるソーシャルキャピタルともいえるものを相互に活かし合い、10年、20年先の社会のあるべき姿を生活者の視点で提言していきたいと考えています。

エネルギー・文化研究所は今後も、研究と実践を通じて持続可能な社会づくりに貢献してまいります。引き続き一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様とご一緒に明るい未来を切り拓いていけることを心より願っております。

世界の記憶にふれる みんぱく収蔵品と研究者のまなざし

取材・執筆=小山茂樹



2007年のカザフスタン滞在中の結婚式にて。右から2人目が藤本さん。



2013年に行われた結婚式の様子。とんがり帽子の「サウケレ」も美しい。

この花嫁衣装は、中央・北アジア展示の人生儀礼のコーナーを担当した藤本透子さんが2014年にカザフスタンで収集したものだ。藤本さんによると、とんがり帽子の「サウケレ」はテュルク系民族の天の神、テングリ信仰に結びつくときれ、先

展 示場のほの暗い空間のなかに白くまぶしく浮かび上がるドレスがある。とんがり帽子が特徴的なカザフの花嫁衣装である。中央アジアを舞台にさまざまな結婚物語が描かれる森薫さんの人気漫画『嫁語り』を思い出す人も多いのではないだろうか。

カザフの花嫁用衣装…遊牧民の伝統と激動の世紀



1970年大阪万博の跡地、万博記念公園にある国立民族学博物館(みんぱく)。1974年創設以来、世界各地の文化を物語る膨大な収蔵品を蓄積してきた。そのなかから毎回一品を取り上げ、収集の背景や研究者の思いを通して、世界の多様な文化に迫る。

端の羽根飾りは邪視避けの意味がある。邪視とは妬みの眼差しであり、視線を向けられた人には災いがあるという民間信仰で、視線が羽根飾りに向けられることで、花嫁自身は守られるのだという。2000年代ま

では西洋風のウエディングドレスが主流だったが、2010年代にこうした伝統的なテイストを現代風にアレンジしたスタイルに変化した。そもそも遊牧民にとっての結婚は、一族と一族のつながりを強固なもの

とするという重要な意味を持っていた。20世紀初頭までは、親が息子や娘の結婚相手を決めた。男性側が結納として家畜を相手方に渡し、娘の方は嫁入り道具を揃えて嫁ぐのが一般的で、結納の家畜を用意できない男性は時に実力行使に出た。若い娘をさらって結婚してしまう、いわゆる誘拐婚である。娘の合意のある場合もあれば、ない場合もあった。

ソ連時代、親が決める結婚は、本人の意思を無視しているということになり結納金も禁止された。自分が決めていいということになった時に娘をさらって逃げる方法が恋愛結婚の一つの形として定着していったのだという。

ソ連解体後は、価値観も揺れ動いた。この時期に娘の合意なしに連れ去ってしまうケースが増えたという調査結果もある。その後、女性の意思を十分に尊重すべきという社会的議論が起き、2025年に誘拐婚を正式に禁止する法律が制定された。

カザフの人々にとって、いまも結婚は重大な関心事だ。200人、300人を招待して行われる盛大な披露宴その中心には、とんがり帽子の花嫁と花婿がいる。遊牧民の伝統、社会主義の思想、ソ連解体後の経済混乱、カザフの人々が経験したさまざまな記憶がその衣装に込められている。

* 特別展「シルクロードの商人(あきんど) 語りーサマルカンドの遺跡とユーラシア交流」(2026年3月19日～6月2日)には、藤本さんが関わった「家族と結婚」のコーナーがあり、ウズベク、キルギス(クルグズ)の花嫁用衣装が展示される。

CEL
40th